

おわりに

「結節点」としての浦添ー



浦添市牧港の高台。ここから海外移民や日本本土出稼ぎのため出発する人たちを見送った（2012年）仲間孝藏提供

おわりに
―「結節点」としての浦添―

宮内久光

おわりに―「結節点」としての浦添―

浦添市移民史では、これまで①ビジュアル版その一海外移民編『世界に羽ばたいたウラシーンチュたち』（平成二三年刊）、②同その二アジア太平洋・国内編『もうひとつのウラシーンチュたちの体験―渡航・戦争・戦後―』（平成二五年刊）、③証言・資料編（平成二六年刊）を刊行してきた。そしてこのたび、④本編（平成二七年刊）を刊行することで、浦添市移民史シリーズはひとまず完結することとなった。ここに至るまで、多くの浦添市民の皆さま、特に移民体験や引揚げ体験をお持ちの皆さま、ご家族の皆さまからの貴重な証言や資料提供などのご協力により、浦添市移民史は完成したといっても過言ではない。まさに、「市民参加による市史づくり」という浦添市史の理念が形になったのである。

浦添市移民史の最大の特徴は、本移民史が対象とした移民の概念そのものである。

本移民史では、近代期以降現在に至るまでにハワイやブラジルなど外国へ渡航した海外移民はもちろんのこと、近代日本の勢力圏内であった台湾、南洋群島、満州、フィリピンなど植民地等への渡航者、「日本本土」と呼ばれる四六都道府県への出稼ぎや集団就職をした国内移動者、戦後米軍統治時代に石垣島への「八重山開拓」に参加した人も移民として取り扱っている。つまり、戦前・戦後を問わず、外国、植民地等、日本本土、沖縄県内へと、移動距離の長短を問わず、浦添から他地域へ移住したウラシーンチュは全て本移民史が対

象とする移民である。

それだけにとどまらない。戦後の米軍基地建設や都市化・住宅地化によって、県内他市町村、さらには奄美地方など他地域から浦添に転入して新たにウラシーンチュとなった人々や、一九八〇年代後半以降、南米から日本の製造現場にデカセギに来たウラシーンチュたちも移民と捉えている。すなわち、浦添から外の世界へ出て行った人々も、外の世界から浦添に入ってきた人々も、本移民史では移民なのである。

このように出移民のみならず、入移民までを移民と広く捉えたことによって、本移民史では、近代期以降の浦添から浦添への人の動きを明らかにするだけではなく、人の動きの歴史を通して、現在の浦添市の都市形成や社会的ネットワークの充実、盛んな国際交流にも言及することができた。そして、この移民の捉え方に立てば、実は現在の浦添市民の多くが「移民」経験者としてこの移民史の対象になっているのである。移民史はお祖父さんやお祖母さんの海外雄飛の記録だけではない。多くの浦添市民にとっては「自分史」にも重なっていることだろう。

そのため、証言・資料編では、浦添に生まれ育ったウラシーンチュの移民経験や引揚げ経験はもとより、他地域出身者が浦添に転入してくる前に経験した外国への移民や植民地等からの引揚げなどの証言も掲載した。そのことが、移民や引揚げといった社会的事象を多面的・多角的に浮かび上げさせることを可能にしている。

さて、ここで改めて浦添から／浦添への人の動きと移民先

での就業や生活をまとめ、浦添の移民の特徴を総観的に検討してみたい。

地割制という独特な土地制度を採用した琉球王国時代はもとより、明治に入ってからウラシynchuたちは、生まれ育った集落の土地に縛られて、自由な移動を行うことは許されなかった。沖縄県では一八九九年（明治三二）から一九〇三年（明治三六）にかけて、「土地整理事業」が実施された。この事業により、集落の土地は共有制から私有制へと移行し、これまで土地に束縛されていた人々が自由の身となった。

純農村であった近代期の浦添は、経済的に貧しい世帯が多く、人口過剰な状況であった。人の移動が自由になり、土地の所有権が認められたため、土地を売却あるいは抵当にして移動費を捻出することが可能となり、他地域へ移動できる条件が整った。明治時代は東京や大阪など国内の労働市場はまだ未成熟なため、ウラシynchuたちは必然的に労働力の需要が高く、賃金も高い外国へと移動していくことになる。

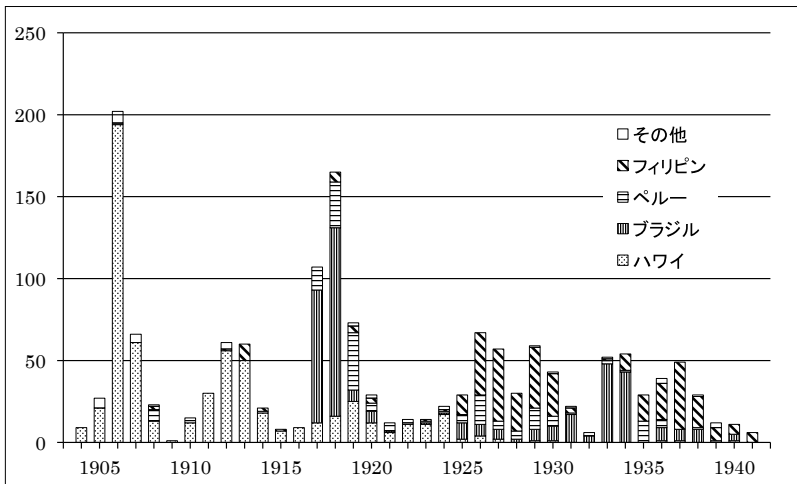
一九〇四年（明治三七）五月二一日に浦添で初めて内間太郎、内間蒲戸、宮城良仁、金城政行の四名に海外旅券が下付される。沖縄からの海外移民は一八九九年（明治三二）から始まっているので、浦添からの移民開始は五年遅れであり、当時存在した五四の区や間切（行政単位）の中では二五番目と平均的であった。

渡航先は全員ハワイである。内間太郎と内間蒲戸は西原出身でともに十九歳であった。また宮城良仁と金城政行は仲間

出身で三六歳と三九歳であった。最初に海外へ移民したこの四名の属性からも、浦添からの初期移民の特徴が四点浮き彫りにされる。すなわち、全員男性であること。同じ集落出身で年齢も近い「顔見知り」同士が一緒に移民をしていること。未成年の若い世代から、戸主として一家の大黒柱になっている世代まで幅広い年齢層が移民をしていること。これらのことから、移民の目的はハワイでの永住ではなく、Uターンを前提とした出稼ぎであること、である。

この後、浦添からはペルーとメキシコへは一九〇六年（明治三九）、フィリピンへは一九〇八年（明治四一）、ブラジルへは一九一七年（大正六）、アメリカ合衆国本土へは一九一九年（大正八）に移民が始まっている。移民先が多い上位四国・地域別に経年変化を表した（グラフ1）によると、浦添からの海外移民は一九〇四年（明治三七）～一九一六年（大正五）まではハ

グラフ1 浦添からの海外移民の推移（1904-1941年）



宮内久光作成

ワイに、一九一七年（大正六）、一八年（大正七）および一九三一年（昭和六）～三四年（昭和九）はブラジル、一九二五年（大正十四）以降はフィリピンへの移民が卓越している。

これは本編の各国への移民の概要でも解説されているとおり、移民受入国と日本との政治的な状況が関連している。また、一九〇六年（明治三九）はハワイ、一九一七年（大正六）から二年間はブラジルを中心に、年間一〇〇人以上が海外移民をしており、移民数のピークとなっている。浦添からの移民数や移民先の経年推移は、沖縄県全体の動きとほぼ一致している。

このような移民の動きは、移動主体である各個人の意思決定の結果ではあるが、移民会社および沖縄で実際に移民の斡旋を行った業務代理人の存在も大きい。移民会社は外国の雇用主と移民契約を結び、全国から移民希望者を集め、横浜港や神戸港から移民を送り出す。その移民会社と契約した業務代理人は、沖縄で新聞広告などを通して移民希望者を募り、移民先での労働や生活の説明を行い、煩雑な渡航手続きなどを代行した。「沖縄移民の父」と称される當山久三も、帝国殖民合資会社と大陸殖民合資会社の業務代理人であった。移民会社と業務代理人の関与がなければ、当時の農民たちの中には移民ができなかった者もいただろう。

浦添から初めて海外旅券が下付されて、ハワイへ渡った内間太郎たちは、仙台移民合資会社の取り扱いであった。特に、ハワイ移民については、日本殖民合資会社が浦添から六〇人を送り出したのをはじめ、大陸殖民合資会社（三九人）

や熊本移民合資会社（三〇人）など一九社が関与している。

『具志川市史移民・出稼ぎ論考編』によると、一九〇七年（明治四〇）までに沖縄に進出した移民会社は二三社なので、そのほとんどが浦添でも移民希望者を募集し、送り出しを行っていたことになる。

その後、日本政府の方針で移民会社の統廃合が行われたため、一九一八年（大正七）年にブラジルやペルーへの移民が最盛期を迎えた頃には、浦添からの移民を斡旋していた移民会社は、森岡移民、東洋移民、南米殖民の三社のみとなった。さらに移民会社の統合は進められ、一九二〇年（大正九）十一月には新設された海外興業株式会社が日本で唯一の国策移民会社となった。以降、フィリピンをはじめ、ブラジル、ペルーなどへの浦添からの移民は、海外興業が取り扱うようになる。

大正期になると、日本の近代資本主義も確立し、京浜工業地帯や阪神工業地帯が形成された。そこでは大小様々な工場が立地し、単純労働力の需要が急速に高まった。沖縄県を含めた西日本の各県からは、仕事を求めて人々が主に阪神工業地帯へと移動していった。浦添も例外ではなく、一九二〇年代からは海外移民のほかに、関西を中心とした国内移動も活発になってくる。一九三五年（昭和一〇）十二月末日現在で日本本土に在住する沖縄県出身者数を市町村別に沖縄県が調査し、その結果を記載した「県外在住者調」（赤嶺康成氏所蔵）によると、当時日本本土に四五四人のウラシンチュウが生活をしていて、そのうち、大阪府在住者（二五二人）が全

体の五六%を占め、兵庫県と和歌山県の合わせた三府県だけで移住者の七割に達している（『沖縄県史七移民』付表第二表）。

浦添から日本本土への移動の特徴は、女性の比率と主体性の高さにある。浦添から海外移民した一三四一人（再渡航者は除く）について、旅券下付表を集計すると、男性は九三四人、女性は四〇七人であった。これは、女性を一〇〇とする性比が二二九となり、極めて高い。また、渡航目的を集計すると、男性の八二・七%は農業や鉱業に就く労働のためである。一方、女性の渡航目的は、夫をはじめ、親兄弟などからの呼び寄せが五八・〇%を占め、労働目的は三二・七%に過ぎない。

これに対して、日本本土への国内移動は海外旅券が不要なために、移動者数や移動理由などを統計的に明らかにできない。先述した「県外在住者調」によると、一九三五年末現在で日本本土に在住するウラシynchuは男性が二四四人、女性が二一〇人であり、性比は一一六と海外移民と比較して低くなっている。移動目的を示した統計資料はないが、証言・資料編には、又吉藤子が名古屋のたわし工場へ（二一三頁）、西原文子と又吉百合子が岡山の紡績工場から神戸のネジ工場へ（二一六頁）働きに言った証言が掲載されている。いずれも集落の女友達同士で相談し、「内地ではご飯も何でもあると聞いていました。ですから、内地へ働きに行くと、口を賄うということで親も喜んでいました。（二二三頁）」や「小さな頃から弟妹の子守ばかりさせられていました。それ

が嫌で、紡績に行きたいと思っていました。（二一六頁）」との証言に見られる。このことから、日本本土への国内移動は女性自身が希望し、積極的に募集人や身元引受人と接触するなど、主体性を持って就業移動を行ったのである。

農場や鉱山での肉体労働が主となる海外移民と異なり、紡績や部品工場など軽作業の仕事もある日本本土の工場労働は、女性でも就業が可能である。また、言葉や文化が全く異なる外国よりも、違いの少ない日本本土の方が生活するには敷居が低かったともいえよう。しかし、憧れて就職した紡績工場では、綿ぼこりや細かな繊維くずが舞う劣悪な作業環境、低賃金・長時間勤務の恵まれない労働条件、寒い冬や慣れない寄宿舎での共同生活など、浦添出身の女性たちを苦しめた。

言葉や文化の違いが少ないのは、植民地等も同様である。近代日本は、台湾、朝鮮、南樺太、南洋群島、満州とアジア太平洋地域に次々と勢力圏を拡大していった。そこは日本国内と同じ生活環境が整えられ、豊かで将来性が約束された場所と認識されていた。特に、委任統治領の南洋群島は、自然環境や産業構造が沖縄に近いことから沖縄県出身者が多く、南洋沖縄社会を形成した。「南洋は沖縄の延長」とも言われ、浦添からも多くの人々が渡航した。「引揚者在外実調査票」からの推計によると、一九四五年（昭和二〇）頃では二四一世帯六八五人のウラシynchuが生活をしていた。浦添の中でも、城間（一五〇人）、伊祖（二二〇人）、仲間（七〇人）など中部地域の集落からの南洋群島への移動が多かった。

南洋群島の中でも、サイパン（二五二人）とテナアン（二〇七人）の両島にウラシーンチュは多く居住していた。両島は、日本の勢力圏に組み込まれて最初に開発が進められた島々である。また、松江春次率いる南洋興発株式会社が製糖事業を独占的に認められた地域でもあった。南洋群島に渡ったウラシーンチュ達は、南洋興発の小作人や農業労働者としてサトウキビ農業に従事した。このほか、製糖工場に勤務する者も多かった。

一九三〇年代に入ると、群島内の他の島々の開発も進み、ミクロネシアの島づたいに農民の移動が行われた。さらに、パラオ島ではアルミニウム、ペリリュー島やロタ島では燐鉱など鉱山労働に就く者もいた。

一九三六年（昭和十一）、広田内閣は「満州開拓移民推進計画」を決議し、二〇年間で日本から満州に一〇〇万戸を送り出す政策を打ち出した。各地で開拓団が結成され、満州に送り込まれた。一九四二年（昭和十七）に結成された青雲開拓団には、浦添からも六〇家族以上が参加し、広大な農地を求めて黒竜江省チチハル近郊に移住した。開拓団という名称ではあるが、実際には現地住民が開墾・耕作している農地を満州拓殖公社が強制的に安く買い上げ、そこへ開拓移民を入植させるという方法をとっていた。そのため、開拓団員は現地到着段階で「こんな大きい土地どうやって耕すかねと思ったくらいです」（証言・資料編二〇七頁）というほど広大な農地が与えられる。土地は肥えており、害虫も少なく、小麦、トウモロコシ、コーリヤン、ジャガイモなどを収穫することが

できた。満州の冬の寒さは厳しいが、浦添にいた時よりも豊かな暮らしが実現できた。

しかし、その豊かな生活は現地農民の土地を収奪した上に成り立っていたこと、豊かさは長続きせず、わずか二年後には日本の敗戦＝満州国の崩壊によって潰えてしまった。その後の満州からの引揚げは凄惨を極め、多くの開拓団員が引揚げ途中で亡くなっていることが幾多の証言からも伺える。戦時中に夢を抱いて満州へ渡ったウラシーンチュたちは、「両親は満州へは本当に死に行っているんです」（証言・資料編一九九頁）と評されるくらい悲惨な移民体験をしている。

台湾は一八九五年（明治二八）以降、最初に日本の勢力圏内に組み込まれた植民地である。沖縄とは距離も近く、那覇港から基隆港までは航路が開かれていた。気候風土も類似点が多いが、浦添から台湾への移民数は一九三〇年（昭和五）十二月末日で十六人に過ぎない。台湾移民の特徴は、朝鮮移民と同様、移民先での職業は小学校教員が最も多いことである。特に教員の渡航は昭和に入った頃から始まり、一九四〇年代に盛んに行われた。台湾や朝鮮など外地で小学校教員になると、六割加俸で住宅も与えられ、若くして管理職になれる可能性が高い、との勤務条件が魅力的であった。また、沖縄で皇民化教育を自ら経験している沖縄師範学校の卒業生たちは、日本への同化教育、皇民化教育を進めている台湾教育界にとって、まさに歓迎される人材でもあった。

浦添からの移民は、低学歴者が高賃金を求めて農場や鉱山、工場などでの単純作業、肉体労働に就く動きであった。

そして移民先では、外国でも日本国内でも南洋群島でも偏見と差別に苦しんだ。しかし、植民地台湾・朝鮮への移民は高学歴者で専門職の移動であった。植民地台湾・朝鮮に渡った浦添出身の小学校教師たちは、日本人児童はもとより、現地人児童に対して皇民化教育を実践した。すなわち、彼らは植民地社会の指導者層として日本の植民地支配の一端を担っていたのである。

さて、沖縄戦前に浦添から外国、日本本土、植民地等へと移民したウラシーンチュの渡航形態と就業についてまとめてみたが、沖縄県全体の中での浦添を、統計データを用いて位置づけてみたい。沖縄県は先述した「県外在住者調」のほか、「外国在住者調」「植民地在住者調」も同時に行っている。なお、当時の日本本土は府県別に、外国は国別に、植民地等は統治地域別に集計されている。この三つの表を合わせることにより、戦前期の沖縄県から外国、日本本土、植民地等への人の動きを統一的に捉えることができる。

まず、一九三五年（昭和一〇）末において、沖縄県出身の県外在住者は九万一一九八人であった。内訳は外国が四万二六六九人、日本本土が三万九一五人、植民地等が一万七六一四人である。同年に実施された国勢調査結果によると、沖縄県の総人口は五九万二四九四人であるため、県外在住者率は十五・四％である。当時、沖縄県内には五五の市町村が存在していた。最も県外在住者数が多いのは本部村の六二五六人、県外在住者率が最も高いのは栗国村の五二・九％であった。

一九三五年末に、沖縄県以外に居住していたウラシーンチュは一七七六人であった。内訳は、外国が一二四人と最も多く、県外在住者の六三・二％を占めた。次いで日本本土が四五四人（二五・六％）、である。浦添村の一九三五年人口は一万一三六九人であるため、県外在住者率は十五・六％である。すなわち、浦添村の県外在住者率は、沖縄県の平均程度といえる。なお、県外在住者数は県内十八位、県外在住者率は三二位であった。植民地等の在住者は一九八人で、県外在住者の十一・一％に過ぎない。これはウラシーンチュが南洋群島や満州、台湾などへ本格的に移民するのは、この調査のあった一九三〇年代後半以降であり、終戦時には植民地等での居住者率がより高まっていたことに留意しなければならない。

次に、県内五五市町村を、卓越する県外在住地を指標に地域類型を行い、その中で浦添村を位置づけてみる。地域類型の方法は、各市町村で最も居住者数が多い府県、国、植民地等別に大類型する。さらにその中で、第一位地域から第三位地域までの居住者数を比較して、第一位地域の居住者数が、第二位地域と第三位地域の居住者数の合計よりも多い場合は「首位地域卓越型」、少ない場合は「一位―二位型」とする小類型レベルの分類を行った。

その結果を示した表1によると、県内五五市町村は一〇の大類型に分類される。そのうち、大阪型には首里市をはじめ、沖縄本島北部を中心に十三市村が属している。また、南洋型も沖縄本島中部を中心に十三町村が属している。このほ

表1 移民卓越流を指標とした県内市町村の類型

大 類 型	小 類 型	該当市町村
ハワイ型 (10)	ハワイ	中城村
	ハワイ・ブラジル	浦添村
	ハワイ・フィリピン	金武村, 小禄村, 豊見城村
	ハワイ・南洋	勝連村, 兼城村, 高嶺村
	ハワイ・大阪	玉城村, 南風原村
ブラジル型 (6)	ブラジル	羽地村
	ブラジル・ハワイ	西原村, 具志頭村, 佐敷村
	ブラジル・大阪	久志村, 大里村
ペルー型 (1)	ペルー・神奈川	喜屋武村
フィリピン型 (2)	フィリピン・南洋	宜野湾村
アジアその他型 (1)	アジアその他・フィリピン	糸満町
台湾型 (8)	台湾	平良町, 下地村, 大浜村, 石垣町, 竹富村, 与那国村
	台湾・大阪	城辺村
	台湾・福岡	多良間村
南洋型 (13)	南洋	名護町, 恩納村, 与那城村, 渡嘉敷村, 座間味村, 渡名喜村, 伊平屋村, 伊良部村
	南洋・ハワイ	具志川村 (中頭郡), 美里村
	南洋・大阪	北谷村, 東風平村, 真壁村
大阪型 (13)	大阪	首里市, 国頭村, 今帰仁村, 真和志村, 粟国村
	大阪・ハワイ	読谷山村
	大阪・ブラジル	東村
	大阪・南洋	大宜味村, 本部村, 越来村, 知念村, 仲里村, 具志川村 (島尻郡)
神奈川型 (1)	神奈川	摩文仁村
和歌山型 (1)	和歌山・南洋	伊江村

か、ハワイ型が一〇村、台湾型が八町村、ブラジル型が六村で、あとはペルー型、フィリピン型、アジアその他型、神奈川型、和歌山型が一村ずつであった。小類型は二三に分類され、南洋卓越型が八町村、台湾卓越型と大阪―南洋型が各八(町)村であった。

この表によると、浦添村は大分類ではハワイ型に所属し、その中でもハワイ―ブラジル型に小分類される。このハワイ―ブラジル型に属する市町村は浦添村のみである。ハワイとブラジルは沖縄県から多くの海外移民が向かった移民先であ

り、県全体ではハワイ移民の方がブラジル移民よりも数が多かった。それにも関わらず、ハワイ―ブラジル型が浦添村しか該当しないというのは興味深い結果である。これは、浦添からの海外移民が一九〇四年(明治三七)に開始されてから一九二〇年(大正九)ごろまでの短期間に集中的に行われ、その期間は基本的にはハワイへ、そして一九一七年(大正六)と一八年(大正七)にはブラジルに大量に渡航したと関連している。そして、一九二〇年代以降は、他町村は大坂や南洋への移民が増加していくが、浦添は日本本土や植民

地等への移民が一九三五年(昭和一〇)まで相対的に少なかったために、ハワイ型を維持することになったと考えられる。戦前期における浦添の人の動きの特徴はここに見いだせる。

さて、広い世界に羽ばたいたウラシンのチユたちにとって、アジア太平洋戦争と日本の敗戦は、浦添に残り沖縄戦を経験したウラシンのチユと同様に、人生を狂わせるくらいの過酷な試練となった。

ハワイやブラジル、ペルーに渡ったウラシンのチユたちは、敵性外国人として現地社会で様々な制約や迫害の中で生きていかなければならなかった。ウラシンのチユを含むハワイ二世の多くは志願して、第一〇〇大隊や四四二連隊戦闘団の一員としてヨーロッパ戦

線で戦い、多くの犠牲を払うことで現地社会からも認められ、日本人の地位回復に貢献した。また、ウラシーンチュで結成されたハワイ村人会は、焦土と化した浦添に生活物資や学用品などを送るなど援助を行い、浦添の戦後復興に大きく貢献した。一方、ブラジルに渡ったウラシーンチュたちは戦時中、「枢軸国財産凍結令」により、銀行預貯金や債券の強制的な供託、財産処分禁止、ついにはサンパウロ市街地やサントスからの日本人立ち退き命令が出されるなど苦勞の連続であった。ブラジル移民の場合は、戦後も日本からの情報が遮断された状況の中で「勝ち組」「負け組」に別れて日本人同士、ウラシーンチュ同士が争うという悲劇も生じた。

日本本土、南洋群島、フィリピン、東南アジアに渡ったウラシーンチュは戦争を直接経験することになる。特に地上戦となったサイパン島やテナアン島では、住民が戦闘に巻き込まれ、極めて多くの犠牲者を出した。運良く生き残った人のほとんどが、逃げまどった山中や壕、断崖、そして投降後の収容所の中で、親や兄弟姉妹と死に別れた悲しい経験を持っている。一方、地上戦がなかった地域でも、空襲や山奥への逃避行などで多くの犠牲者を出している。

台湾と満州では、戦争そのものより、終戦後から日本への引揚げまでに味わった不安や絶望感が、多くの証言から伺い知ることができる。それまで植民地の支配層として現地の人々に接していた立場が、終戦と同時に逆転してしまい、守ってくれる日本軍も行政機関も崩壊した中で、現地の一部の人々からの襲撃や飢え、病氣などと闘いながら何とか沖縄

にたどり着いた、という共通体験を有している。

戦争は国土の周辺地域、立場の弱い人に最も被害と苦痛をもたらす。アジア太平洋戦争では、それが沖縄であり、異郷の地で暮らす移民なのだろう。そのため、戦後は沖縄も移民も平和を希求する気持ちは大変強い。

戦後、アジア太平洋地域に居住していたウラシーンチュたちは、強制的に浦添に引き揚げさせられ、沖縄戦で生き残ったウラシーンチュと一緒に、浦添で新たな生活を再スタートすることになった。しかし、生活が厳しいことには変わりなく、ウラシーンチュの中で移民熱は燃え続けていた。特に、南洋群島からの引揚者たちは、南洋への再移民を熱望していたが、それが叶わない国際的な情勢となったため、官民あがて南米諸国への海外移民に活路を見いだそうとした。

戦後の沖縄からの海外移民は、終戦三年後の一九四八年（昭和二三）にアルゼンチンへ三三人、ペルーへ一人の送り出しにより再開される。琉球政府も積極的な移民政策をとり、一九五〇年代後半から六〇年代初頭までは、毎年一〇〇〇人を越える人々が、南米（ブラジル、アルゼンチン、ボリビア）に移民するようになり、「移民ブーム」が再現された。

国際協力事業団発行の「沖縄県と海外移住」によると、一九五四年（昭和二九）～一九九四年（平成六）までに沖縄県から送り出された海外移民（A）は一万四八五人を数えた。そのうち、浦添からの海外移民は四一人であり、県出身海外移民の三・九%を占めた。一九五〇年（昭和二五）の国勢調査によると、沖縄県の人口（B）は六九万八八二七人なの

で、海外移民者比率（ $A/B \times 100$ ）は一・五%になる。一方、浦添の海外移民者比率は三・五%に達する。これは一九九四年（平成六）に沖縄県に存在した五三市町村の中では六番目に高い。すなわち、戦後の浦添は、海外移民輩出地としての性格を有していたのである。

浦添からの戦後移民の主な移民先はブラジルで、三六四人が渡伯している。これは戦前にブラジル行き海外旅券が下付された三九三人に匹敵している。浦添からのブラジルへの戦後移民は、戦前期にブラジルに渡ったウラシンチュからの呼び寄せが多い。それと同時に、南米拓殖会社移民が多いことも特徴である。

浦添を含む沖縄本島中部地区は、一九五〇年代に入ると米軍基地が集中に建設されるようになる。基地建設に伴い、土地を取り上げられた人々を南米に移民させようと、中部地区の十四市町村長が発起人となって一九五七年（昭和三二）に設立されたのが南米拓殖会社である。同社の取締役となった又吉正雄浦添村長（当時）は、現地会社設立と入植地選定のため、自らブラジルに渡航している。そして強力にブラジル移民を推奨した結果、牧港を中心に浦添から多くの南米拓殖会社移民が行われることになる。しかし、先発隊メンバーの又吉清栄が「入植地では具体的な計画の実施が行われず、土地の配分もなされず、先発隊は後発移住者を迎えました。」（証言・資料編、六二頁）と証言しているように、南米拓殖会社移民は失敗に終わった。移民後に有利な土地の配分を期待して、同社の株を大量に購入して渡伯した「移住者たちは

四散に追いやられ、悲惨な思いで入植地からみんななくなりました」という状況に追い込まれた。南米拓殖会社移民の失敗は、会社の資金不足が主要因であるが、そもそも米軍基地建設による土地の接収という、戦後の浦添が置かれた社会的状況が、移民のプッシュ要因となっていたことは、きちんと記憶しておかなければならないことである。

戦後二〇年ほどたった一九六〇年代後半になると、浦添の経済成長は目覚ましく、海外移民に行かなくても浦添で生活ができる状況になってくる。明治以降、浦添から人が外の世界へ出る流れが主流であったが、これ以降は逆に人が外の世界から浦添に入る流れが卓越するようになる。浦添の人口も日本復帰直前の一九七〇年（昭和四五）には四万一七六八人を数え、二〇年間で約三・五倍に急増している。

浦添が人を惹き付けた要因は、西海岸沿いに米軍兵站基地「牧港補給地区（Camp Kinser）」が建設され、軍作業員や米軍家族を相手にする商店、外資系企業などが、軍用道路一号線（現在の国道五八号）沿いに集積し、「基地の町」を形成していったこと。コカコーラ社をはじめ、琉球電力公社、琉球セメント、オリオンビール、沖縄トヨタなど大企業の本社、事業所が浦添に立地し、軍作業以外にも雇用の場が提供されたこと。浦添は首都・那覇市に隣接し、緩斜面で交通良好な優良住宅地が次々と開発されていったこと、などである。

浦添を三行政区域別に概観すると、人口の流入は、一九五〇年代は屋富祖など「基地の町」が形成された西部区域に集中する。それが一九七〇年代に入る頃には大平、伊祖の中部

区域への人口流入が著しくなる。さらには一九八〇年代に入ると、安波茶や前田など東部区域の人口の伸びが見られるようになった。すなわち、浦添の人口流入フロンティアは、西から東へ、海岸沿いから内陸部へと進んでいったのである。

その後、一九八〇年（昭和五五）には七万二八二人、一九九〇年（平成二）には八万九千九百九十四人、二〇〇〇年（平成十二）には一〇万二千七十三人と一〇万人の万台に乗り、二〇一〇年（平成二二）では十一万三千一七人となっている。県内四一市町村の中では、浦添市は那覇市、沖縄市、うるま市に次いで人口数は第四位であるが、琉球王国時代の間切の領域をそのまま引き継ぎ、町村合併を行わなかった地方自治体としては、県内最大の都市となっている。

さて、現在の浦添をめぐる人の動きについて見てみよう。

海外に在住するウラシynchuたちは、それぞれの地で活躍をしている。ハワイではすでに三世、四世の時代になっている。彼らは教育熱心な家庭に育ち、高等教育を修得して専門職や公務などの仕事に就いて、ハワイ社会に貢献している。その一方、自分のルーツを大切に思い、空手や三線、琉球舞踊など沖縄の伝統文化を嗜んでいる人も多い。そして、ハワイ浦添市人会に所属して、新年会、敬老会などを通してウラシynchu同士親睦を深めている。

ブラジルやアルゼンチンなど南米諸国では、戦後一世の方々はまだご健在である。青雲の志を抱いて浦添を離れ、異郷の地では社会的、経済的に苦勞の連続であったことは、証言・資料編に掲載された各人の体験談からも伺えるが、現在

の生活状況には満足しており、移民をしてよかったと感じている人が多い。南米のウラシynchuの特徴は、一九八〇年代後半以降、デカセギのために日本へ還流移動を行い、日本で資金を得た上で南米に帰国後、経済的に成功を遂げた人が多いことである。南米各国では浦添の郷友組織が設立され、県人会活動の中でもウラシynchuたちは、さまざまな親睦や交流を重ねている。例えば、ペルーの沖縄県人会主催のゲートボール大会では、出身市町村ごとにチームが編成されており、ゼッケンに「URASOE」と書かれたユニホームを着たウラシynchuたちが、故郷の名誉をかけて戦っている姿を見ることが出来る。

このように、世界各地に住むウラシynchuたちはそれぞれのホスト社会の中で組織化された沖縄県人会、浦添市人会などで親睦と交流を行ってきたが、グローバル化した現代では、世界各地に住むウラシynchuたちを結びつける動きが進んでいる。きっかけは一九九〇年（平成二）に沖縄県主催で開催された「世界のウチナーンチュ大会」である。世界各地から二三千七人の沖縄県系人が沖縄県に集まり、里帰りをすると同時に、各地で様々なイベントが繰り広げられた。浦添市でも「世界のウラシynchu歓迎会」が開催され、浦添に住むウラシynchuと世界各地に住むウラシynchuが市民レベルで交流した。「世界のウチナーンチュ大会」はその後、五年ごとに開催され、海外からの参加者も二〇一一年（平成二三）の第五回大会では五一九一人に増加した。毎回、「世界のウラシynchu歓迎会」も開催され、ウラシynchu

チュ同士の交流は続いている。

「世界のウチナンチュ大会」が回を重ねる中で、各国・地域の沖縄県系人同士の交流と連帯が強まってくる。一九九七年（平成九）には、国内外に居住する沖縄県系人の企業経営者たちが中心になってWUB（世界ウチナンチュ・ビジネス・アソシエーション）が設立され、世界規模で経済、文化、社会活動を行っている。現在、沖縄、日本本土を含めて世界に二二の支部が活動し、国際大会では商談会やビジネス分科会が開催されている。このほか、二〇〇三年には「第一回世界のウチナンチュ会議」が開催され、以降、ウチナンチュ大会開催の二、三年後に沖縄以外で県系人たちが集う国際イベントが継続している。そこでは、「ウチナンチュのアイデンティティ」や、「グローバル時代の人材教育」などのテーマでシンポジウムが行われた。さらに、二〇一一年（平成二三）には、大学生を中心とした沖縄県系の若い世代がWYUA（世界若者ウチナンチュ連合会）を発足させた。現在、七カ国九支部を擁して、次世代の沖縄県系人達が連携している。いずれの沖縄県系ネットワークにもウラシアンチュが活躍していることは、言うまでも無い。

浦添市と海外ウラシアンチュ社会との結びつきは、このほかにも南米移住者子弟研修生受け入れ事業でもみられる。戦前、戦後を通じて貧困に苦しむ郷里・浦添に、経済的援助を行ってくれた海外移民に対する浦添市民の感謝と、南米各国からの「故郷とのつながりを保ち、若い世代に継承したい」という強い要望を受けて、この事業は一九八八年（昭和六

三）からスタートした。二〇一四年（平成二六）現在までのべ五二人のウラシアンチュの子孫を研修生として沖縄に招待している。六カ月の研修期間に研修生は日本語のほか、三線、琉球舞踊、空手などの沖縄の伝統文化を学び、企業を訪問して日本の産業や経済への理解を深めている。浦添市や学校の行事にも参加し、市民との交流も積極的に行っている。研修生は帰国後も浦添市人会などの活動の中心となり、浦添市と移民先地との交流の架け橋となって活躍している。

アジア太平洋地域では、戦後移民はフィリピンなどでごく一部にみられるに過ぎない。沖縄に引き揚げてきた引揚者たちの中には、戦後沖縄や浦添のリーダーとなって活躍した者も多い。引揚者たちは南洋群島帰還者会や沖縄タバオ会、沖縄満州会などを結成し、親睦と同時に、各地で現地慰霊祭を行い、現地の人たちとの交流を続けてきている。特に、南洋群島帰還者会は事務局が長年浦添市内に置かれ、活動の拠点となっていた。この会では一九八九年（平成元）から二〇〇七年（平成一九）までの間、ミクロネシアの高校生などを沖縄での慰霊祭に招待し、その際に浦添工業高校の生徒たちとの交流の機会を提供した。まさに志の高い民間レベルの国際交流である。

戦後、沖縄各地から浦添に転入してきた人々も、すっかり浦添に溶け込み、今では立派なウラシアンチュになっている。二〇〇四年に浦添市が六五歳以上の市民を対象に行った調査結果によると、浦添出身者は市民の五・三％であるのに対して、南部出身者の二・六・二％をはじめ、北部出身者（二

三・四％）や宮古出身者（十三・五％）など、浦添以外を出身とする人が多数を占めている。彼らは同じ出身者同士で郷友会を組織し、浦添をはじめ、那覇都市圏に流入してくる同郷者の就職や住まいを紹介する窓口の役割を果たした。現在、浦添に住む人が所属している郷友会は一〇〇以上が確認されている。近年は、新年会や敬老会、運動会など各種行事で同郷者同士の親睦を深めるだけでなく、出身地の伝統文化を守る活動をしたり、過疎化が進行して担い手が少なくなった出身地の伝統行事の支援を行ったり、浦添と出身地を結ぶ重要な役割を演じている。

このように見えてくると、浦添から外の世界に出たウラシンチュも、外の世界から浦添に来て新しくウラシンチュになった人々も、浦添を中心に多面的で重層的な社会的ネットワークの中で生活をしていることがわかる。すなわち、浦添は様々な社会的ネットワークの結節点になっているのである。出身地も人生経路も多様な人々が、浦添という場所出会い、融合し合うことで、新しい浦添市が形成され、新たな浦添文化が創造されているのである。移民Ⅱ人の動きの結果として生じた多様なウラシンチュの存在こそが、「太陽と緑にあふれた国際性豊かな文化都市」浦添の発展の原動力なのである。

今年（二〇一五年）は、浦添から内間太郎たちが初めて移民として海を渡ってから一一一年目に当たる。昔も今も故郷を離れて見知らぬ土地へ移動するのは、その人にとって人生の決断が求められることには変わりない。本移民史は浦添を

めぐる人の動きの記録であるが、本移民史を通して、個人の人生経路と生き様、個人と政治・社会との関係、ウラシンチュのアイデンティティ、浦添市のまちづくりと国際交流など、さまざまな事柄について、市民の皆様が考えるきっかけとなれば幸いである。

to Japanese, the trainees learn the traditional cultures of Okinawa such as the sanshin, Ryukyu dancing, and karate, during their six months of training. They also visit companies to deepen their understanding of Japanese industry and economy. The trainees participate in Urasoe city and school events, actively interacting with the residents. After they return home, they play a key role in Urashinchu associations, as well as serving as bridges for interactions between Urasoe city and the areas to which they have emigrated.

Repatriates from the Asia-Pacific region formed the South Sea Islands Returnees Association, Okinawa Davao Association, Okinawa Manchuria Association, and other organizations, continuing interactions with the local people, performing memorial services locally in various locations, while also promoting friendship.

The people who moved into Urasoe from various other regions in Okinawa following the war have also integrated themselves into Urasoe, and are now themselves fine Urashinchu. According to the results from a survey conducted in 2004 by Urasoe city targeting citizens 65 or older, 5.3% of citizens were from Urasoe, compared to a majority who were from areas other than Urasoe, including those from the south of the Okinawa island (26.2%), from the north (23.4%), from Miyako (13.5%), and other areas. Those from the same areas formed hometown associations and played a role in introducing employment and housing to people from the same area. In recent years, they not only deepen friendships between people from the same hometown through various events such as New Year's parties, senior recreational meetings, and athletic events, they also protect the traditional cultures of their hometowns, assist in the holding of traditional hometown events for which the number of people carrying on these traditions have decreased due to depopulation, and they play an important role in bringing together Urasoe and their hometowns.

From these perspectives, you can see that Urashinchu who have gone out to the outside world from Urasoe and people who have come from the outside world into Urasoe to become the new Urashinchu, live in an integrated, multi-layered social network. In other words, Urasoe has become a node for various social networks. People of various origins and who have walked down different courses in life met in a place called Urasoe, and by fusing together, formed a new Urasoe city and created a new Urasoe culture. The existence of various Urashinchu, a result of migrants = the movement of people, is the driving force in the development of Urasoe as "an internationally rich cultural city overflowing with sunshine and greenery."

reversion of Okinawa to Japan had increased rapidly by approximately 3.5 times in 20 years.

What brought people to Urasoe was the construction of Makiminato Service Area (Camp Kinser), a logistics base for the US military along the west coast. With the construction of the base, stores that catered to military workers and families of the troops, foreign companies, and other establishments started to appear, concentrating along Military Road Route 1 (the current National Route 58), and a "base town" formed. Major companies established their headquarters and offices in Urasoe, and the fact that there were employment opportunities other than military related work was also a factor. Another was that Urasoe is situated next to the capital, Naha, and outstanding residential areas with gentle slopes and good traffic conditions continued to be developed.

The inflow of population was concentrated in the western areas where the "base town" was formed, such as Yafuso, in the 1950s. Once the 1970s started, there was significant population inflow to the central areas such as Ohira and Iso. With the start of the 1980s, we saw a growth in population in the eastern areas such as Ahacha and Maeda. In other words, the population inflow frontier advanced from along the coast to inland areas.

The population changed from 70,282 in 1980, to 89,994 in 1990, 102,734 in 2000, and 1,110,317 in 2010. Urasoe has the largest number of population in the cities of Okinawa that has not merged with other municipalities.

Now let us look at the movement of people in modern Urasoe.

In Hawaii there are already 3rd and 4th generation emigrants but they treasure their roots and there are many who are fond of the traditional cultures of Okinawa. In South American countries such as Brazil and Argentina, there are postwar first generation who are still alive and healthy. Characteristics of the South American Urashinchu were that many migrated back to Japan as migrant workers after the late 1980s, returned back to South America after acquiring money in Japan, and enjoyed financial success after returning home to South America. Hometown friendship organizations were established in Hawaii and South America, deepening friendships among fellow Urashinchus through New Year's parties, senior recreational meetings, and other events.

In the present age of globalization, there are movements to join together Urashinchu in Japan and abroad. What started this movement was the "Worldwide Uchinanchu Festival" sponsored by Okinawa in 1990. 2,397 people of Okinawa origin from all around the world gathered in Okinawa, and in addition to them visiting their hometowns, there were also events held in various locations. Participants from foreign countries increased with each festival, eventually rising to 5,191 in 2011 for the 5th festival. A "World Urashinchu Welcome Reception" is held in Urasoe for each festival, enabling interactions at the civic level.

Interactions and solidarity between people in various countries and regions of Okinawa origin have further strengthened, and in 1997 the WUB (Worldwide Uchinanchu Business Association) was established. There are currently 22 branch offices operating around the world. In 2003, the "1st Worldwide Uchinanchu Festival" was held and there have been many international events since, where people originally from Okinawa gather. In 2011, the WYUA (World Youth Uchinanchu Association) was established and it currently operates nine branch offices in seven countries, where the next generation of people of Okinawa origin cooperate together. It goes without saying that Urashinchu play an active part in all of these Okinawa-related networks.

The ties between Urasoe city and overseas Urashinchu society can also be seen in training program for the young descendants from Urasoe. This program was started in 1988 as a way of saying thank you to the overseas emigrants who financially assisted their hometowns before and after the war, as well as in response to the strong requests from various South American countries of "maintaining ties with their hometowns and passing them down to younger generations." By 2014, 52 Urashinchu decedents have been invited to Okinawa as trainees. In addition

For the Urashinchu who wanted to travel out into the wider world, the Asia-Pacific war and the defeat of Japan became a severe hardship for them, in the same manner as those who remained in Urasoe and experienced the Battle of Okinawa.

In Hawaii, Brazil and Peru, migrants had to live in the local society with various limitations and persecutions as an enemy alien during the war. Some second generation Hawaiians enlisted and fought as members of the 100th Infantry Battalion in the 442nd Infantry Regiment on the European fronts. Suffering many sacrifices, they were accepted by the local society and contributed to the recovery of the standing of the Japanese people. On the other hand, in Brazil, migrants faced continuous hardships such as forced deposits of bank savings, being prohibited from disposing of property, and eventually eviction orders for Japanese from Santos. After the war, the Urasoe Shijinkai (Overseas Urashinchu Associations) helped by sending daily commodities, school supplies, and other materials to Urasoe, hugely contributing to the postwar reconstruction of Urasoe.

Urashinchus who had emigrated to the mainland Japan, the South Sea Islands, the Philippines, and Southeast Asia experienced the war directly and there were many victims. Most of the people who survived had severe experiences of losing parents or siblings in mountains, caves, cliffs, where they had fled, as well as in prison camps after the surrender.

In Taiwan and Manchuria, the anxiety and hopelessness that they experienced after the war until they returned to Japan can be known through many testimonies. There are common experiences of fighting back against attacks from some local people, starvation, disease, and finally arriving back in Okinawa.

Those who lived in the Asia-Pacific region were returned by force to Okinawa and started their lives again with the people who survived the Battle of Okinawa. However, there was no change to the fact that life was still hard and the passion for migration continued to burn among the Urashinchu. Repatriates from the South Sea Islands in particular yearned to re-emigrate back, but this did not become true, and they tried to find ways to emigrate to South America.

Immigration from postwar Okinawa restarted in 1948, three years after the end of the war. The Ryukyu government engaged in an enthusiastic migration policy, and from the late 1950s to the early 60s, more than 1,000 people migrated every year to South America (Brazil, Argentina, Bolivia) and a "migration boom" was reproduced. From 1954 until 1994, there were 10,485 emigrants from Okinawa, 411 of which were from Urasoe. According to the 1950 national census, the emigrant ratio of Urasoe reached 3.5% and is the 6th highest in Okinawa. In other words, postwar Urasoe had the characteristic of being a source for emigrants. The main destination for postwar emigration from Urasoe was Brazil, with 364 people moving there. This is comparable to the 393 pre-war emigrants from Brazil. The postwar emigrants from Urasoe to Brazil were often summoned by the Urashinchu who emigrated there before the war.

Since the early 1950s construction of US bases increased. The South America Colonization Company was established in 1957 in order to have people who had their land confiscated for the construction of the bases emigrate to South America. As a result of having strongly recommended emigration to Brazil, many people immigrated to Brazil from Urasoe.

Approximately 20 years after the war, in the latter half of the 1960s, the economic growth of Urasoe was remarkable, and it became possible for people to live a life in Urasoe without having to emigrate. Until then, the trend was a flow of people from Urasoe to the outside world, but from this time onward, this trend reversed with a flow of people from the outside world into Urasoe. With this, the population of Urasoe that had been 41,768 just prior to the

Starting in the 1920s, domestic movement became more active, mainly in Kansai where an industrial area had formed, and the demand for an unskilled workforce rapidly increased. At the end of December, 1935, 454 Urashinchus were living on the mainland Japan. Among these were 252 Osaka residents, which accounted for 56% of the entire group. When combined with residents in Hyogo and Wakayama, the number reaches 70%.

The breakdown of those 454 people was 244 men and 210 women, and there is not much difference between sexes when compared with overseas emigration where men accounted for approximately 70% of them. Women independently started to work in factories on the mainland Japan, where a work such as spinning and parts factories were available. It may be said that it was easier to live on the mainland Japan than overseas because there are little differences in language and culture.

In respect to little difference in language and culture, this is the same for the colonies as well. Modern Japan gradually expanded its sphere of influence from Taiwan to Korea, southern Sakhalin, the South Sea Islands, Manchuria, and the Asia-Pacific region. In the South Sea Islands under Japanese mandate in particular, the natural environment and industrial structure were similar to those of Okinawa, and so there were many people from Okinawa, including many who emigrated from Urasoe. According to estimates, in about 1945, 685 Urashinchus in 241 households lived there. There was a lot of movement from central areas such as Gusukuma (150), Iso (120) and Nakama (70).

Among the South Sea Islands, many Urashinchu lived in Saipan (252) and Tinian (207). Both islands were incorporated into the Japanese sphere of influence, where development was pushed forward first, and were areas where the Nanyo Kohatsu Company was granted a monopoly in sugar manufacturing. The people who emigrated to the South Sea Islands engaged in sugar cane agriculture as tenants and field hands of the Nanyo Kohatsu Company. There were also many who worked in sugar factories. There were those who worked as miners on Palau Island for aluminium, and Peleliu Island and Rota Island for mineral phosphates.

In 1936 the Hirota Cabinet passed the "Manchuria Development Emigration Promotion Plan" and proposed a policy to send 1 million households to Manchuria from Japan over 20 years. Development groups were formed around the country and sent to Manchuria. More than 60 families from Urasoe participated in the Seiun Development Group formed in 1942, and emigrated to the suburbs of Qiqihar in Heilongjiang in search of expansive farmlands. Farmland cultivated by the local inhabitants was forcibly purchased in easy prices by the Manchuria Takushoku Corporation and the development migrants were settled there. The expansive farmlands were fertile with few pests, allowing them to harvest wheat and corn.

Taiwan was the first colony to be incorporated under the Japanese control after 1895. A maritime route was opened from Naha Port to Keelung port, and the climate and natural features had many similarities to those of Okinawa. As with emigrants to Korea, the majority of emigrants to Taiwan were elementary school teachers. They were given 60% additional allowance as well as a house, and with the possibility of rising to a managerial position at a young age, work conditions were attractive. Elementary school teachers from Urasoe who went to Taiwan and Korea implemented the imperialistic education that they themselves had received, acting as one part of Japanese colonial rule as leaders of the colonial communities.

Migration from Urasoe was intensively carried out in the short period of time since its start in 1904 to around 1920. During this period immigration was mostly to Hawaii, and in 1917 and 1918 there was large immigration to Brazil. Starting in the late 1930s, there was serious migration to the mainland Japan, the South Sea Islands, Manchuria and Taiwan. The characteristics of the movement of the Urasoe people in the early years of before the war can be seen here.

Conclusion

Hisamitsu Miyauchi

To date, Urasoe City has published (1) Visual History of Urasoe Emigration Part 1: International Emigration - Urashinchus launching out into the world (2011), (2) Visual History of Urasoe Emigration Part 2: Asia-Pacific and Japan, Another experience of the Urashinchus - Migration, War, and after the War (2013), and (3) Testimonial Accounts and Reference Material in 2014. At this time, (4) this publication, will also be published. The history of Urasoe Emigration was completed due to positive cooperation of Urasoe citizens, especially those with migration and repatriation experience, as well as the their families who provided valuable testimony and documentary materials. This is truly the results with "creating a city history through civic participation and collaboration."

The biggest characteristic of Urasoe city's migration history is based on the concept of emigrant and immigration.

The migrants that are covered in this paper are emigrants who made the voyage to foreign countries such as Hawaii and South America, as well as those who emigrated to areas that were under the control of modern Japan such as Taiwan, the South Sea Islands, Manchuria, and the Philippines. Domestic migrants such as migrant workers and group job seekers who migrated to Daito islands and the mainland Japan, and also those emigrants who participated in the "Yaeyama reclamation" during the postwar US occupation of Japan. In other words, this paper includes all Urashinchus who emigrated to other areas regardless of the distance of their move.

It also covered in this paper are those who moved into Urasoe from other regions in Okinawa including Amami as a result of the postwar construction of US bases, residential areas, and urbanization. That is to say, emigrants who came from the outside world into Urasoe as well as those who went out into the world from Urasoe.

With this wide definition of immigration, not only will we clarify movement to and from Urasoe since the modern times, we were able to refer to the urban formation of Urasoe city, the enhancement of its social networks, and its rich international exchanges. If we take this idea, then in actuality, most of the current citizens of Urasoe have experienced "migration" and become a target of this emigrant history. Migration history is not only a record of grandparents embarking overseas, it also overlaps with "the history of oneself."

I would now like to try to briefly consider the emigrants of Urasoe.

"Land Readjustment Projects" were implemented in Okinawa from 1899 until 1903, and land ownership rights were accepted and the movement of people became finally free.

On May 21, 1904, five years after overseas immigration from Okinawa started in 1899, the first passports are issued in Urasoe to four people. They were issued to two 19-year-olds from Nishihara, as well as a 36-year-old male and a 39-year-old male from Nakama, all of whom emigrated to Hawaii. From the attributes of these four people, four characteristics of the initial emigration from Urasoe become apparent. That is to say, they were all men. "Familiar faces" from the same village and of similar ages emigrated together. There is a wide age range from younger generations to the heads of households who were the main breadwinners of the family. From this, it can be seen that emigration was not for the purposes of permanent residence but as migrant workers with the presumption of returning back home. Following this, emigration to Peru and Mexico started in 1906, the Philippines in 1908, Brazil in 1917, and the mainland United States in 1919.

total de 52 personas descendientes de Urashinchu como becarios. En un período de 6 meses de aprendizaje del idioma japonés, también aprenden sobre aspectos de la cultura tradicional de Okinawa con el sanshin, danzas Ryukyu, Karate, etc., realizan visitas a empresas para que puedan comprender a fondo la industria y economía japonesa. También participan en eventos de la ciudad de Urasoe y de colegios, interactuando activamente con la ciudadanía. Luego de regresar a sus países ellos se convertirán en el centro de la Organización de Amigos de Urasoe, actuando como puente de unión entre la ciudad de Urasoe y los países de emigración.

Los repatriados del Pacífico asiático formaron asociaciones de Repatriados de las islas del Pacífico Sur, la Asociación Okinawense Davao, Asociación Okinawense de Manchuria, etc., continuando el intercambio con la gente local con fraternidad llevando servicios conmemorativos a varios lugares.

Después de la Guerra, incluso las personas que han venido de otras regiones de Okinawa, se fusionaron con Urasoe, convirtiéndose en respetables Urashinchu. De acuerdo a una encuesta realizada en el 2004 a ciudadanos mayores de 65 años de edad, las personas nacidas en Urasoe comprenden el 5.3%, mientras que las personas nacidas en el sur de Okinawa (26.2%) y las nacidas en el norte de Okinawa (23.4%) y las nacidas en la isla Miyako (13.5%), entre otros, son mayoría en comparación a las nacidas en Urasoe. Ellos crearon la Organización de Amigos del Mismo Lugar de Origen con las personas originarias del mismo lugar, contribuyendo a conseguir trabajos y viviendas entre ellos. En los últimos años, en las fiestas de año nuevo, de la tercera edad y los distintos eventos deportivos no sólo profundizan la fraternidad entre las personas oriundas del mismo lugar, sino que también realizan actividades de protección de la cultura tradicional de su lugar de origen que ha quedado con pocos líderes debido al avance de la despoblación, apoyando a su ciudad natal con eventos tradicionales, desempeñando un papel importante en la conexión de su ciudad natal con Urasoe.

Si lo vemos así, los Urashinchu que salieron de Urasoe al mundo exterior y las personas que vinieron del mundo exterior a Urasoe convirtiéndose en Urashinchu, viven en una red social de múltiples facetas y varias capas alrededor de Urasoe. Dicho de otra forma, Urasoe se ha convertido en el punto de enlace de las distintas redes sociales. Las personas con distintos lugares de nacimiento y distintas vidas recorridas se reunieron en un lugar llamado Urasoe, y fusionándose han creado una nueva ciudad de Urasoe con una nueva cultura de Urasoe. La presencia de una variedad de Urashinchu como resultado de la inmigración =movimiento de personas, es la fuerza impulsora del desarrollo de Urasoe, “Ciudad Cultural de rico Carácter Internacional de donde desborda el Sol y la Naturaleza”.

más en 20 años.

Uno de los factores que atrajeron a las personas a Urasoe fue la construcción de la base de logística militar estadounidense “Campamento Kinser”, lo que reunió negocios para el personal militar y sus familias, empresas extranjeras, etc., a lo largo de la Ruta Militar Integral Nro. 1 (actual Ruta 58), con lo que se comenzó a formar una “ciudad de base militar”. El que las sedes de grandes empresas, oficinas empresariales se abrieran en Urasoe también proporcionó puestos de trabajos aparte del trabajo militar. Cerca de la capital Naha, se desarrollaron buenas zonas residenciales de acceso de tráfico. Esto son algunos entre otros factores.

La afluencia de población en la década de 1950 se concentró en las zonas occidentales donde se formaron “ciudad de base militar” como Yafuso, etc. A principios de la década de 1970 la afluencia de población es significativa en las zonas central como Ohira y Iso. A principios de la década de 1980 se empieza a ver el crecimiento de las zonas orientales como Ahacha y Maeda. En conclusión, la frontera de afluencia de la población de Urasoe avanzó desde las costas hasta el interior.

En el año 1980 la población era de 70,282 personas, en 1990 de 89,994 personas, en el 2000 de 102,734 personas y en el 2010 creció a 110,317 personas. En la ciudad que no se ha fusionado con otras municipales en Okinawa, Urasoe tiene la población más grande.

Bueno, veamos los mayores movimientos de personas en la actual Urasoe.

En Hawái ya se ha llegado hasta la generaciones III y IV, pero hay muchas personas que aprecian sus raíces y siguen con las tradiciones culturales. En países de Sudamérica, como Brasil y Argentina, etc., las personas de la generación I de la posguerra aún están vivos. Una característica de los Urashinchu de Sudamérica es que, a partir de 1980, muchas personas migraron de regreso al Japón, y luego de obtener capital en Japón, regresaron a su país logrando éxito económico. En Hawái y en los países de Sudamérica se estableció la Organización de Amigos de Urasoe en donde se organizan fiestas de año nuevo y fiestas de la tercera edad en las que se profundizan los lazos de las personas con las mismas raíces.

En esta era de globalización, se está progresando en las actividades de unión entre los Urashinchu locales y en el extranjero. Con el “Festival Mundial Uchinanchu” que organizó la prefectura de Okinawa en el año 1990, se pudo lograr esta unión. 2,397 personas originarias de Okinawa de países de todo el mundo se reunieron en Okinawa, y regresaron a su lugar de origen celebrando varios eventos en distintos lugares. Cada vez van aumentando los participantes del extranjero, llegando a 5,191 participantes en el 5to Festival en el 2011. En Urasoe también se lleva a cabo la “Fiesta de Bienvenida de los Urashinchu”, realizándose intercambios a nivel de los ciudadanos.

Para reforzar aún más el intercambio y la solidaridad entre las personas originarias de Okinawa de varios países y regiones, se creó en 1997 la WUB (Asociación Mundial de Negocios de los Uchinanchu). Actualmente existen 22 sucursales activas en todo el mundo. En el 2003 se llevó a cabo la “1era Reunión Uchinanchu del Mundo”, continuando luego eventos internacionales en los que se reúnen las personas originarias de Okinawa en el mundo. En 2011 se inició la WYUA (Federación Mundial de Jóvenes Uchinanchu), la cual en la actualidad cuenta con más de 9 sucursales en 7 países, cooperando con la nueva generación de personas originarias de Okinawa. No hace falta decir que los Urashinchu participan también de la red de las personas originarias de Okinawa.

Los lazos entre los Urashinchu locales y en el extranjero también se pueden ver en los Programas de Capacitación para Becarios Descendientes de Urasoe. Agradeciendo el apoyo económico de los emigrantes en el extranjero antes y después de la guerra y respondiendo al fuerte deseo de “mantener la conexión con el lugar de origen y dejarla como herencia a las siguientes generaciones”, se iniciaron estos programas a partir de 1988. Hasta 2014 se han invitado un

antes de la guerra.

Y bueno, para los Urashinchu que migraban en todo el mundo, la derrota japonesa en la Guerra del Pacífico Asiático fue como para los que se quedaron en Urasoe experimentando la batalla de Okinawa, una dura prueba.

En Hawái, Brasil y Perú tuvieron que vivir durante la guerra con varias restricciones y persecuciones en la sociedad local como extranjeros enemigos. Los de la II generación en Hawái se ofrecieron como voluntarios para luchar en el frente europeo como miembros del Batallón Nro. 100 y el Regimiento Nro. 442, sacrificio que fue reconocido en la sociedad local, lo que contribuyó a la recuperación de la posición japonesa. Por otro lado, en Brasil, se les obligó a hacer aportaciones de sus ahorros bancarios, se les prohibió la enajenación de propiedad, siendo finalmente expulsados de las ciudades de Sao Paulo y Santos, con continuas dificultades. Después de la guerra, la Asociación de Personas de Urasoe en el Extranjero envía ayuda de suministros para vivir y útiles escolares a Urasoe que quedó reducido a cenizas, lo que contribuyó enormemente a la reconstrucción de Urasoe en la postguerra.

Los Urashinchu que migraron a las otras islas principales del Japón, las islas del Pacífico Sur, Filipinas y sudeste de Asia, experimentaron la guerra directamente, sufriendo un gran número de víctimas. La mayoría de los sobrevivientes, que escaparon a las montañas, búnkeres, acantilados y los que luego de la rendición fueron enviados a prisión, experimentaron la separación de por vida de sus padres, hermanos y hermanas.

Por muchos testimonios se puede saber de la ansiedad y desesperanza que sufrieron en Taiwán y Manchuria desde que terminó la guerra hasta su repatriación. Una parte de las personas en la zona sufrieron ataques, pasaron hambre y lucharon contra enfermedades, llegando de alguna manera a Okinawa.

Las personas que vivían en la región del Pacífico asiático fueron repatriadas a Okinawa, empezando una nueva vida junto con los sobrevivientes de la batalla de Okinawa. Sin embargo, la vida continuó siendo dura, por lo que entre los Urashinchu, las ansias de migrar seguían ardiendo. Especialmente, los repatriados desde las islas del Pacífico Sur, estaban ansiosos por volver a la región, lo cual no pudieron realizar, por lo que encontraron una salida en la emigración a los países de Sudamérica.

La migración de Okinawa al extranjero se reanudó 3 años después de que terminó la guerra en 1948. El Gobierno Ryukyu también toma una política de inmigración proactiva, desde finales de 1950 hasta principios de 1960, más de 1,000 personas por año emigraron a Sudamérica (Brasil, Argentina, Bolivia), volviéndose a producir el “boom migratorio”. Entre 1954 a 1994 las personas que emigraron al extranjero desde Okinawa suman 10,485 personas, entre ellos, los emigrantes de Urasoe suman 411 personas. Según el censo de 1950, la proporción de emigrantes al extranjero de Urasoe alcanzó el 3.5%, ocupando el 6to lugar en Okinawa. Dicho de otro modo, el Urasoe de la postguerra tenía un carácter de emigrante al exterior. El destino principal de emigración desde Urasoe fue Brasil, con 364 personas que viajaron. Esto se puede comparar con la cifra de emigración a Brasil de 393 personas antes de la guerra. La inmigración a Brasil en la postguerra se caracteriza por el llamado de los Urashinchu que viajaron en el período anterior a la guerra.

A principios de la década de 1950 para que las personas que han sido privadas de sus tierras con el fin de construir las bases militares estadounidenses pudiesen emigrar, se creó una empresa colonizadora a Sudamérica en 1957. Como resultado, el gran número de personas que han emigrado a Brasil desde Urasoe.

A finales de 1960 a casi 20 años después de la guerra, el crecimiento económico de Urasoe se hizo notable, lo que hace que se pueda vivir en Urasoe sin emigrar al extranjero. La corriente principal hasta la fecha de salida al exterior de la gente de Urasoe, luego cambió a una corriente en la que la gente del exterior venía a Urasoe. La población de Urasoe justo antes de la reversión a Japón en 1970 era de 41,768 personas, aumentando rápidamente casi 3.5 veces

Unidos continental a partir de 1919.

Desde la década de 1920, se forma la zona industrial y crece con rapidez la demanda por la mano de obra no calificada en Kansai a donde también se vuelve activa la emigración. A fecha 31 de diciembre de 1935, en las otras islas principales del Japón vivían 454 personas Urashinchu. Entre ellos, los que residían en Osaka (252 personas) llegaban a un 56%, unidos a los que residían en Hyogo y Wakayama, los 3 lugares alcanzaron el 70% de emigrantes.

De 454 personas, 244 fueron varones y 210 mujeres, si se compara con el porcentaje que viajó al extranjero de 70% varones, en la migración dentro de Japón no hubo diferencia entre varones y mujeres. Los trabajos en las fábricas de hilado y repuestos entre otros trabajos ligeros en Japón fueron realizados en su mayoría por mujeres. También se puede decir que el emigrante a Japón era más fácil que una inmigración a países extranjeros en el que lenguas y cultura son diferentes.

Las diferencias de lenguaje y cultura también fueron pequeñas en las colonias. El Japón en la era Moderna iba extendiendo su dominio en Taiwán, Corea, Sur de Sakhalin, islas del Pacífico Sur, Manchuria y la región del Pacífico asiático. En particular, en los dominios de las islas del Pacífico Sur el entorno natural y la estructura industrial eran parecidas a Okinawa por lo que habían muchas personas de Okinawa, entre las cuales muchas personas de Urasoe se trasladaron a esas zonas. Según las estimaciones, en 1945 alrededor de 241 hogares con un total de 685 personas de Urashinchu vivían ahí. Muchas personas emigraron desde Gusukuma (150 personas), Iso (120 personas), Nakama (70 personas).

En las islas del Pacífico Sur vivían muchos Urashinchu, en Saipán (252 personas) y Tinian (207 personas). Las dos islas, primeras en desarrollarse entre los dominios japoneses, la compañía Nanyo Kohatsu S.A. recibió derechos exclusivos en el negocio azucarero. Las personas que fueron a las islas del Pacífico Sur se dedicaron a la agricultura de caña de azúcar como campesinos y trabajadores agrícolas de Nanyo Kohatsu. Muchas personas trabajaron en la fábrica de azúcar. Hubo personas que también trabajaron en la explotación de fósforo en las islas Peleliu y Rota, y de aluminio en la isla de Palau.

En 1936, el gabinete Hirota aprobó el “Plan de Fomento de Colonización en Manchuria”, anunciándose una política de envío de 1 millón de familias a Manchuria desde Japón en 20 años. Equipos de desarrollo se formaron en varios lugares y fueron enviados a Manchuria. En el Equipo de Desarrollo Seiun que se formó en 1942, se incluyó más de 60 familias de Urasoe, emigrando a los suburbios de Heilongjiang Qiqihar en busca de grandes campos de cultivo. Manchuria Takushoku Corporación lleva a cabo la compra forzosa a bajos precios de las tierras que cultivaban los residentes del lugar y los colonizadores pudieron instalarse ahí. Las grandes áreas de cultivo eran tierras fértiles, con pocas plagas, pudiendo cosechar el trigo, maíz, etc.

Taiwán fue la primera colonia que fue incorporada al dominio japonés desde 1895. Se abre la ruta desde el puerto de Naha hasta el puerto Keelung donde el clima era muy similar. En la emigración a Taiwán, así como a Corea, la profesión que más se dio en el destino migratorio fue la de profesores de primaria. Se dieron el 160% sueldos y viviendas. Los maestros de primaria de Urasoe que fueron a Taiwán y Corea llevaron a cabo la japonización que ellos mismos experimentaron, como estratos líderes de la sociedad colonial jugaron un papel importante en el proceso de colonización.

La emigración desde Urasoe se realiza en forma intensiva en un corto período de tiempo comprendido entre el inicio de 1904 hasta alrededor de 1920, ese período fue básicamente a Hawái, y luego en 1917 y 18 hubo una gran cantidad de viajes a Brasil. Desde finales de 1930, la inmigración se intensifica a las otras islas principales del Japón, las islas del Pacífico Sur, Manchuria, Taiwán, etc. Aquí se encuentra las características del movimiento humano de Urasoe

Conclusión

Hisamitsu Miyauchi

En la ciudad de Urasoe hasta ahora se han publicado 1) Edición Versión Visual 1 de la Migración al extranjero “Los Urashinchu que Volaron al Mundo” (2011); 2) Igualmente la Edición 2 del Pacífico Asiático y Japón “Otra Experiencia de los Urashinchu – Migración, la Guerra y la Postguerra-”(2013); 3) Edición de Relatos Testimoniales y Datos de Referencia (2014). En esta ocasión se va a publicar 4) Edición principal (2015). Se ha terminado la Historia de la Migración de Urasoe en cooperación con los ciudadanos de Urasoe, en especial con las personas que han experimentado la emigración y expatriación, y con sus familias con la aportación de valiosos testimonios y documentos. Precisamente, tomó forma la filosofía de “Construcción de la Historia de la Ciudad con la Participación de los Ciudadanos”.

La más grande característica de la Historia de la Migración de Urasoe es el concepto de migración a la cual apunta.

Llamamos migrantes por supuesto a las personas que viajaron al extranjero como Hawái y Sudamérica, etc., los que viajaron a los países bajo el dominio de Japón en la era Moderna como Taiwán, las islas del Pacífico Sur, Manchuria, Filipinas, los que emigraron a las islas Daito, a las otras islas principales del Japón para empleos colectivos y los que participaron en el “Desarrollo de Yaeyama” en la postguerra bajo el dominio militar de los Estados Unidos. En otras palabras, se incluyen a todos los Urashinchu que hayan emigrado a otros lugares sin importar la distancia.

Pero eso no es todo. También se incluyen a las personas que llegaron de otras regiones en Okinawa, incluso Amami para la construcción de las bases militares estadounidenses y para la urbanización y construcción de viviendas. En otras palabras, las personas que salieron de Urasoe al mundo exterior y las que vinieron del mundo exterior a Urasoe, se les considera emigrantes e inmigrantes.

Con esta amplia definición de la migración, no sólo se clarifica el movimiento de las personas luego de la era moderna de Urasoe/ a Urasoe, sino que a lo largo de la historia del movimiento humano, se ha podido hacer referencia a la mejora de la actual Urasoe urbana y las redes sociales como también a un próspero intercambio internacional. Si se utiliza esta idea, de hecho muchos de los actuales ciudadanos de Urasoe forman parte de la historia de la migración como experimentadores de la “migración”. La historia de la migración no son sólo los registros de los abuelos que volaron al extranjero, sino a ella también se suma la “experiencia personal”.

Bueno, aquí me gustaría considerar nuevamente de manera sinóptica sobre los migrantes de Urasoe.

En Okinawa desde 1899 hasta 1903 se implementó el “Proyecto de Reajuste de Terreno”, en el que se concedía la propiedad de los terrenos y el movimiento de las personas se volvió libre.

Muchas familias de escasos recursos se trasladaron de Urasoe al extranjero donde había gran demanda de mano de obra con salarios altos.

Cinco años más tarde desde 1899, cuando se inició la migración en Okinawa, el 21 de mayo de 1904 en Urasoe se emiten por primera vez pasaportes internacionales para 4 personas. 2 varones de 19 años de Nishihara y 2 varones de 36 y 39 años de Nakama, todos tenían como destino Hawái. De los atributos de estas 4 personas también se resaltan 4 puntos de las características de los primeros emigrantes de Urasoe. Estos son, todos son varones. Han nacido en el mismo pueblo, casi de la misma edad y migraron entre “conocidos”. Desde generaciones jóvenes a generaciones que son ya jefes de familia de diferentes edades. Estas personas no emigran con la intención de quedarse, sino de juntar dinero y regresar. Luego continúan los viajes a Perú y México en 1906, Filipinas en 1908, Brasil en 1917 y Estados



用語解説・年表

用語解説

石川 友紀

①移民会社

明治二〇年代から大正の初期にかけて、日本政府の許可により移民事業、とくに移民の募集や送り出し、あるいは周旋をおこなった民間の会社。正式には移民取扱人と称する。沖縄県では帝国殖民合資会社などの業務代理人となった當山久三などが移民会社として営業し、多くの移民をハワイ・北米・中南米へ送り出した。一九〇三年（明治三六）には史上最高の三六社となるが、栄枯盛衰が激しく、一九〇八年（明治四一）までに合計五二社も設立された。しかし、一九二〇年以降は統廃合されて海外興業株式会社一社のみとなった。

②契約移民

移民先における農園の耕地主と前もって契約書を交わし、その条件を承諾して渡航する移民のこと。国（地域）によりその時期が異なる。日本においては一八六八年（明治元）ハワイへ最初の契約移民が送られたが、その後途絶え、一八八五年（明治十八）以降再びサトウキビ耕地への契約移民で本格化する。沖縄県からは一八九九年（明治三三）に最初で最後の契約移民がハワイへ、ペルーへは一九〇六年、ブラジルへは一九〇八年以降に送られている。

③自由移民

海外へ渡航するにさいし、前もって契約などの取り決めをしていない自由に行動できる移民のこと。自由移民は現地到着後自由に職をみつけ、自活していくことを原則とするが、その大部分は

親族による呼び寄せ移民であった。戦後の移民はすべて個人の意志による自由移民の形をとっている。

④呼び寄せ移民

海外の移民先に家族や親戚がいて、その地へ呼び寄せられる移民のこと。領事館発行の呼び寄せ人の証明書が必要とした。

⑤計画移民

琉球政府が策定した計画に基づいておこなわれた移民のこと。太平洋戦争終結とともに、海外からの引き揚げ者などで急激に人口が膨張し、また、農耕地の一部が米軍基地に接収されたため、沖縄において社会問題となった。沖縄群島政府は移民計画を策定し、一九五二年（昭和二七）八月石垣島の米原地区へ、一九五四年六月ポリビアのサンタクルス州へ移民を送り出した。

⑥補助移民

海外移民の渡航にさいし、旅費などの補助をおこなって送り出された移民のこと。ブラジル移民の事例で言えば、初期にはサンパウロ州政府により、その後は日本政府により補助され、一九二三年（大正十二）の関東大震災以後多くの移民が送り出された。

⑦敵性外国人

戦争法規の範囲内において、攻撃・破壊・掠奪および捕獲などの加害行為をなしうべき性質をもった外国人。太平洋戦争勃発により、日本人はアメリカ合衆国など連合国側から敵性外国人とみなされた。

⑧委任統治

第一次世界大戦後、ドイツの海外領土とトルコの領有をはなれた地域にたいして適用された国際連盟のもとでの植民地統治方式。国際連盟の国際的統治というよりは、受任国が自国領にたいするものに近い統治をおこなうことが認められた妥協の産物である。委任統治地域、住民の政治的・経済的発達の程度や地理的理由によって、A式、B式、C式に分けられた。C式は旧ドイツ領の南西アフリカと太平洋諸島に適用され、日本は赤道以北の太平洋諸島（旧南洋群島）の受任国となった。

⑨旅券と海外旅券下付表

旅券はパスポートと言い、外国に渡航する国民にたいし、その者の属する国の政府が所持人の国籍および身分を公証し、かつ、渡航先の外国官憲にたいし、所持人にたいする保護と旅行の便宜を依頼する文書。この旅券を発給したさいの外務省に保管されている記録が「海外（外国）旅券下付表」であり、明治以降旅券を取得した個人の氏名・生年月日（年齢）・続柄・本籍地などが記され、移民名簿としても使用されてきた。

⑩戦争花嫁

一九四七年（昭和二二）以後アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリアなどの軍人・軍属と結婚した日本人女性。戦後日本に駐留したアメリカ軍の兵士・軍属と結婚し、アメリカ合衆国へ渡った日本人花嫁は、一九五〇年代末までに四万人から五万人いたと言われている。ハワイなどで軍人と結婚した場合、「軍人花嫁」とも言われた。国際結婚の一形式である。

⑪勝ち組・負け組

第二次世界大戦における日本の敗戦をめぐって、南米の日本人間で発生した殺傷を伴う事件もあった思想上の対立。勝ち組は日本の敗戦を信じていない者、負け組は敗戦を認める者であった。ブラジルの日本人移民間での対立が激しく、沖縄移民は勝ち組が多かったと言われている。

⑫産業開発青年隊

日本本土の産業開発青年隊は、農家の二・三男対策の一環として、国土開発のための建設技能者を育成する目的で、建設省により一九五一年（昭和二六）に設立された。沖縄県では一九五九年（昭和三四）四月戦後混沌とした社会のなかで、青年に希望と勇気を与え、有能な青年を育成することを目的に、沖縄青年連合会長瑞慶覧長仁を中心に、沖縄産業青年協会が創立され、その訓練施設として同青年隊が開設された。現在、東村平良山に訓練施設をもち、多くの人材を輩出し、ブラジルでは「移民青年隊」として活躍している。

⑬うるま病

一九五四年（昭和二九）ポリビアのジャングル地帯を開拓中の沖縄移民団に発生した熱病。当初原因不明であったが、後日病原体は節足動物を媒介とする新しいウィルスであることが確認され、移民の耕地名「うるま」にちなんで病名がつけられた。初回ポリビア移民のうち死亡者が十五人もでて開拓の犠牲となった。

⑭ 模合

頼母子講や無尽講の一種で、沖縄県や移民先で広く庶民に親しまれている相互扶助的な金融の仕組み。参加者が定期的に集まって、一定の掛け金を出し、互いに融通しあう。小は親睦を兼ねたものから、大は大型機械購入・住宅・商売・旅行資金まで、移住地でさまざまな模合がおこなわれている。

⑮ 出稼ぎとデカセギ

出稼ぎとは、戦前からあり、日本人が金を稼ぐために郷里から海外や他府県へ出て働くこと。デカセギとは、南米の日系人が、最初是一世が、その後は二世・三世が金を稼ぐために、外国人労働者として日本へ来ること。一九八〇年代の後半から始まり、一九九〇年（平成二）六月に実施された出入国管理及び難民認定法の改正により急増した。海外在住の日系人の一世はもちろん、二世・三世まで、日本での労働者として滞在を認められ、彼らが日本で定住することも多くなり、日本の製造業などの労働者不足を補った。

⑯ 開洋会館

開洋会館は一九三四年（昭和九）六月那覇市若狭町二丁目に、県内や海外の移民関係者の寄付などにより、移民会館として落成した。鉄筋コンクリート三階建ての本館と、木造二階建ての宿舍二棟、木造平屋建ての附属建物一棟から成る。落成一か月後より使用が認められ、沖縄県海外協会は同館で、海外渡航者のための手続き一切を、また、移民教育や訓練などを無料で実施した。一九三四年から一九三八年までの五年間に、同館の取り扱い収容人

員は総数六六四三人を数え、年平均一三二八人が利用していた。太平洋戦争で同館は消滅し、戦後再建されることはなかった。

⑰ 開南中学校

開南中学校は一九三六年（昭和十一）四月沖縄県の海外移民の帰国子弟に、県立学校では行いえない日本式の教育を施すために、島尻郡真和志村字与儀樋川原に私立の男子中学校として開校した。県立第二中学校の校長であった志喜屋孝信が同校の校長に就任し、アメリカ合衆国カリフォルニア州で農業移民として成功した中谷（旧姓嘉手苅）善英の建設資金供与により、県のあとおしもあって、初年度生徒定員一〇〇人、教員八人で発足した。一九三六年の一期生から一九四四年の九期生まで生徒を受け入れていた。

入学年齢の制限などもなく、移民帰りの子弟のみならず、この教育方針に賛同する生徒も入学させ、人材育成に貢献した。第二次世界大戦時同校の在校生徒は七八三人であったが、一九四五年三月鉄血勤皇隊に編成され、各部隊に配属された。その結果敗戦により大きな犠牲者を出した。戦後同校は再建されることはなかったが、開南の地名は残っている。

⑱ 神戸移住教養所

神戸移住教養所は前身が一九二八年（昭和三）神戸市山本通り三丁目に開設された国立移民収容所である。この名称がよくないとのことで、四年後の一九三二年に国立の神戸移住教養所に改称され、一九四一年太平洋戦争勃発により閉鎖された。戦後一九五二年（昭和二七）外務省により国立の移住幹旋所（のち神戸移住

あつせん所と改称)として再開された。同館は一九六四年(昭和三九)海外移住事業団により神戸移住センターとなり、二〇〇九年(平成二二)には神戸市立の「海外移住と文化の交流センター」として現在に至っている。その建物は建設当時から鉄筋コンクリート五階建てと附属施設からなり、戦災や震災にも倒れず、中南米移民、とくにブラジル移民の宿泊所・検査所や出発港に近い役割を果たしてきた。

入所者は一週間から一〇日間ほど滞在し、研修内容は移住国の人情・風俗・習慣等や農業経営の方法などの教養であった。

⑲長崎移住教養所

長崎移住教養所は神戸移住教養所より五年おくれて一九三三年(昭和八)長崎市梅香崎町二七(現在の長崎市立市民病院)に鉄筋コンクリート三階建てとして開設された。同所は政府によるもので、関西に立地している神戸移住教養所を見習った経営方式をとっていた。移民・植民が多かった九州・沖縄・中国・四国地域に近接し、また、移民・移住先としての東アジア・東南アジア・南洋群島に近いという交通の便からの活用がなされ、大きなメリットがあった。

⑳植民地

植民地はコロニーとも言い、ある国の海外移住者によって、経済的に開発された地域。本国にとって原料供給地・商品市場・資本輸出地をなし、政治上も主権を有しない属領である。植民地はギリシャ、ローマ時代から植民都市という形で存在していた。十五世紀以降スペインとポルトガルの新大陸の発見より次々と植民

地の形成がなされてきた。日本が植民地に関わったのは一八九五年(明治二八)の日清戦争後中国に勝って以後である。日本は台湾・朝鮮や樺太(サハリン)の南半分を領有し、南洋群島など南方方面へも進出していった。

㉑引揚者在外事実調査

一九五六年(昭和三一)に厚生省が実施した悉皆調査。戦後おもに外地から沖縄への引揚世帯ごとに本籍地、終戦時の住所、世帯主の在外年数、勤務先、家族構成、引揚状況などの記載がある。

㉒引揚者給付金

一九五七年(昭和三二)に日本政府が引揚者給付金等支給法を制定し、外地からの引揚者及びその遺族に対して一〇年間償還の記名国債をもって「引揚者給付金」を支給した。米軍統治下の沖縄においてもこの法律が適用され、五万一千七四九世帯が手続きを済ませて給付金を受領した。

㉓復員名簿

戦後海外からの引揚者を一時収容したキャステロ海外引揚民収容所から行き先地の各市町村長に宛てて送付された受付名簿を浦添村においては「復員名簿」と題して保存した。

年表

年 号	浦添関係	沖縄・日本・世界
一八六八（明治元）年		明治維新。 日本から海外への移民がはじまる。
一八八二（明治十五）年	三月二五日、浦添小学校創立（浦添間切番所内浦添小学校）。	
一八八五（明治十八）年		四月、ハワイへの第一回官約移民。
一八八八（明治二一）年	一月、浦添小学校、浦添尋常小学校と改称する。	
一八九四（明治二七）年		八月、日清戦争起こる。
一八九五（明治二八）年	四月、浦添尋常小学校仲西分校創設。	四月、日清講和条約調印（遼東半島・台湾の割譲）。 五月、台湾総督府を設置。
一八九九（明治三二）年		玉置半右衛門、大東島の開墾を出願。大東島開拓の始まり。 十二月、沖縄からハワイ契約移民が那覇港を出航。
一九〇二（明治三五）年	中頭尋常高等小学校を廃し、浦添尋常小学校が浦添尋常高等小学校になる。仲西尋常小学校創立（浦添尋常小学校から独立）。	
一九〇四（明治三七）年	ハワイへの海外旅券が九人に下付される。浦添から最初の海外渡航。	二月、日露戦争起こる。 沖縄からフィリピンへベンゲット道路工事のため渡航。
一九〇五（明治三八）年	ニューカレドニアへの初めての海外旅券が六人に下付される。	九月、日露講和条約調印。 十二月、満州に関する日清条約調印。
一九〇六（明治三九）年	メキシコへの初めての海外旅券が七人に下付される。ペルーへの初めての海外旅券が一人に下付される。 海外移民総数浦添一九三人（沖縄県二〇三六人）	一〇月、沖縄から最初のペルー契約移民横浜港を出航。 十一月、南満州鉄道株式会社設立。
一九〇七（明治四〇）年	カナダへの初めての海外旅券が三人に下付される。	沖縄から最初のカナダ移民が渡航。

一九〇八（明治四二）年	一月、浦添間切から浦添村になる。 フィリピンへの初めての海外旅券が二人に下付される。 香港への海外旅券が一人に下付される。	日本からブラジルへ最初の移民が笠戸丸で渡航（沖縄出身者 三三五人を含む）。
一九一〇（明治四三）年		八月、日本、韓国を併合。 九月、朝鮮総督府設置。
一九一二（大正元）年	ハワイ宜野湾浦添同志会創立。 マレー半島への海外旅券が四人に下付される。	一月、中華民国成立（中国）。
一九一三（大正二）年		沖縄から最初のアルゼンチン移民が渡航。
一九一四（大正三）年		七月、第一次世界大戦起こる。 一〇月、日本海軍、赤道以北のドイツ領南洋諸島（群島）を 占領。
一九一五（大正四）年	浦添村出身の海外在留者数は三九四人、送金総額は九一九〇 円。	
一九一六（大正五）年	字宮城のフィリピン移民女性二人、入墨（ハジチ）のため強 制送還。	
一九一七（大正六）年	四月、仲西尋常小学校に高等科を併置。 浦添からブラジルへの初めての海外旅券が下付される。この 年合計八一人がブラジルへ渡った。	
一九一八（大正七）年		十一月、第一次世界大戦終わる。
一九一九（大正八）年	ジャワへの初めての海外旅券が一人に下付される。 北米への初めての海外旅券が一人に下付される。	沖縄から最初のボリビア移民が渡航。
一九二〇（大正九）年		一月、国際連盟成立。同盟及連合国ト独逸国トノ平和条約 （ベルサイユ条約）公布。赤道以北の旧ドイツ領諸島の委任 統治国を日本に決定。

一九二一（大正一〇）年		サイパン島に南洋興発株式会社、資本金三〇〇万円で設立。
一九二二（大正十一）年	ハワイ浦添村人会創立。	四月、パラオのコロール島に南洋庁設置。サイパン移民が本格的にはじまる。
一九二三（大正十二）年		南洋興発株式会社サイパン工場、製糖事業の開始。
一九二四（大正十三）年		南洋興発株式会社、サイパン工場従業員の募集広告を新聞に掲載。
一九二八（昭和三）年	浦添村出身者のダバオ在住八七世帯。	
一九二九（昭和四）年		製糸会社の待遇が悪く、沖縄出身女工の帰郷が相次ぐ。
一九三〇（昭和五）年	シンガポールへの初めての海外旅券が一人に下付される。	
一九三一（昭和六）年	アルゼンチンへの初めての海外旅券が一人に下付される。	九月、満州事変。 労働力過剰で南洋庁が移民阻止を沖縄県に通知。
一九三二（昭和七）年		三月、満州国建国。
一九三三（昭和八）年	ペルー移民の豊里陳盛が高額寄付をし、伊祖城跡に伊祖神社（英祖之宮）が建設される。	三月、日本、国際連盟を脱退。
一九三四（昭和九）年	ペルー浦添村人会創立。	六月、開洋会館（移民訓練所）が那覇市若狭町に落成。
一九三六（昭和十一）年		県外出稼ぎ女工七三人が台中丸で渡航。
一九三七（昭和十二）年		七月、盧溝橋事件。
一九三八（昭和十三）年	ボルネオへの海外旅券が一人に下付される。	
一九三九（昭和十四）年	県外出稼ぎ紡績女工総数二七七人中、浦添村出身者は二〇人（製糸女工一人、男七人を含む）。	九月、第二次世界大戦起こる。 沖縄から最初の満州農業移民二三人が出航。沖縄県、八ヶ町村三万戸、十五万人満州移住計画をうちだす。
一九四〇（昭和十五）年	満州開拓青少年義勇軍募集で浦添十三人を割り当てて。	
一九四一（昭和十六）年	四月、国民学校令により、浦添尋常高等小学校は浦添国民学校、仲西尋常小学校は仲西国民学校と改称。	十二月、日本軍がハワイの真珠湾を攻撃。海外移民が中断する。フィリピンのミンダナオ島に米軍が上陸。
一九四二（昭和十七）年	十一月、青雲開拓団の先遣隊が沖縄を出発。	

一九四三（昭和十八）年	三月、青雲開拓団第一陣が沖縄を出発。	沖縄から満州開拓青少年義勇軍への送出五五〇人に達する。
一九四四（昭和十九）年	四月、満州国東安省報国農場隊五〇人が満州へ渡る（浦添の三人を含む）。 浦添から青雲開拓団に到着（一月第一陣、二月第二陣、六月第三陣、十二月第四陣）。 八月、仲西国民学校児童等、宮崎へ疎開。 九月、浦添国民学校児童等、宮崎へ疎開。	昭和十九年度第十四次満州大陸集団開拓団三千戸について浦添以外十八ヶ村で分村懇談会が実施される。 六月、サイパン島に米軍が上陸。 七月、テニアン島に米軍が上陸。 老幼婦女子・学童八万人を日本本土へ、二万人を台湾への集団疎開を決定。 八月、対馬丸、米軍潜水艦の魚雷攻撃で沈没。 九月、フィリピンのタバオ空襲。パラオのペリリュー島に米軍が上陸。 一〇月、那覇を中心に大空襲を受ける。台湾空襲。
一九四五（昭和二〇）年	四月二六日、米軍、前田高地を攻撃。	三月、東京大空襲。 四月、沖縄本島に米軍が上陸。 五月、台北大空襲。 八月、原爆を搭載したB二九がテニアン島より離陸、広島・長崎に投下。
一九四五（昭和二〇）年	浦添村内の人口四一一二人。	八月、ポツダム宣言受諾。終戦。 九月、第二次世界大戦終わる。 各地からの引き揚げ開始。 十二月五日、ハワイで「沖縄衣類救済運動委員会」がつくられる。
一九四六（昭和二一）年	二月六日、各収容所より仲間キャンプへの移動許可が出る。 二月九日、先遣隊が仲間キャンプの建設を開始。 三月九日、南洋群島からの引き揚げ者十九人を受け入れる。 三月十八日、仲間キャンプ内に浦添初等学校開校。 四月五日、浦添村役所開庁（浦添初等学校内）。 六月一日、旧浦添村全十八字住民が各収容所から仲間キャンプへ集結。 七月十五日、西原、前田、沢岬、経塚、安波茶に旧居住地への移動許可が出る。 七月十九日、宮城の住民に旧居住地への移動許可が出る。 八月五日、安波茶に青テント校舎の仲西初等学校開校。	三月、南洋群島からの引き揚げがはじまる。 六月、米軍物資が無償配給から有償配給になる。 六月二三日、ロサンゼルスで「在米沖縄救援連盟」がつくられる。 八月、日本本土からの引き揚げ第一船が入港。 十二月末、国内外からの引き揚げ終了。

一九四七（昭和二二）年	二月一〇日、伊祖、当山、大平の住民に旧居住地への移動許可が出る。 四月十二日、仲西、城間、屋富祖、牧港、港川、勢理客、内間の住民に旧居住地への移動許可が出る。 四月二二日、五月二四日、六月十七日、ハワイ村人会より浦添初等学校へ学用品が届く。 宮崎より疎開児童が帰郷（一〇月六日浦添初等学校、十一月九日、仲西初等学校）。	ハワイで財団法人「沖縄救済更生会」がつくられる。 二月二八日、台湾の台北市で抗争が起きる（二・二八事件）。沖縄出身者も巻き込まれて犠牲になった。 四月、在伯沖縄救援連盟が発足。沖縄文化救済協会に組織替え。
一九四八（昭和二三）年	三月一〇日、ハワイ沖縄救済会より浦添初等学校へノートが届く。 四月五日、浦添中学校開校。 四月十六日、仲西初等学校、安波茶から宮城に移転。中等学校を併置。 六月二八日、浦添初等学校西原分校開所。	二月、南洋群島帰還者会が結成される。 アルゼンチンへ三三人、ペルーへ一人が、沖縄から戦後初の移民として渡航。 九月二七日、ハワイ連合沖縄救済会から豚五〇〇頭余りが沖縄へ届く。
一九四九（昭和二四）年	三月三日、ハワイより浦添中等学校へノートが届く。 二月三日、小湾の住民が宮城に移住開始。	ボリビアで「沖縄戦災民救援会」がつくられる。 三月、日本政府、本土から沖縄への旅券発行開始。 ブラジルとメキシコへ戦後初の移民が渡航。
一九五〇（昭和二五）年	牧港補給地区建設がはじまる。 二月、ハワイ村人会より浦添初等学校と浦添中等学校へ学用品が届く。 六月、牧港火力発電所建設工事が始まる。 一〇月二二日、ハワイ村人会より浦添初等学校へオルガン一台、柱時計一個が届く。	郷友会の結成がはじまる。 崎本部郷友会（本部町）が結成される。 在伯沖縄救援連盟が沖縄文化救済協会に組織替え。同時期に全伯沖縄県人会が誕生する。 八月三日、沖縄からアルゼンチンへ呼び寄せ移民約一〇〇人が渡航。
一九五一（昭和二六）年	一号線道路の拡張工事がはじまる。	九月、日本国との平和条約（サンフランシスコ条約）調印。
一九五二（昭和二七）年	四月二二日、ペルー村人会より浦添小学校へ義援金二万一千六二円が送られる。	四月、琉球政府創立。 四月、初等学校を小学校に、中等学校を中学校に改称。 四月、日本国との平和条約発効。

一九五三（昭和二八）年	十一月三〇日、ブラジル在浦添村人会より教育復興資金が送られる。	沖縄文化救済協会と全伯沖縄県人会が解消して新たに全伯沖縄海外協会が設立される。
一九五四（昭和二九）年	四月、屋富祖通り会発足。 六月九日、ボリビア移民壮行会を開催。	六月、沖縄からボリビアへ最初の計画移民が渡航。
一九五五（昭和三〇）年	浦添をふくむ沖縄各地より五三世帯二五四人が石垣島の久宇良に移住。 米軍補給（QM）部隊が具志川村天願から城間地域に移動（牧港補給地区）。	全伯沖縄海外協会から在伯沖縄協会と改称。
一九五六（昭和三一）年		十二月、日本の国際連合への加盟が認められる。
一九五七（昭和三二）年		八月、ボリビア移民、第一オキナワ移住地へ移り住む。 本土集団就職がはじまる。
一九五八（昭和三三）年	四月一日、仲西小学校と仲西中学校を分離。	三月十九日、沖縄からボリビアへの計画移民三一人、ブラジルへの呼び寄せ移民十五人、アルゼンチンへの呼び寄せ移民十一人が出発。
一九五九（昭和三四）年		ボリビアに第二オキナワ移住地が創設される。
一九六〇（昭和三五）年	一〇月二四日、ボリビア移住者募集懇談会が開かれる。 十一月、浦添在平安座郷友会が結成される。 十二月、浦添村人口 二万四〇一〇人。	
一九六一（昭和三六）年		ボリビアに第三オキナワ移住地が創設される。
一九六四（昭和三九）年	二月、中学校を卒業して日本本土へ就職する生徒へ浦添村から餞別が贈られる（浦添中学校六人、仲西中学校一〇人）。 四月、神森小学校開校。	
一九六五（昭和四〇）年	十二月二〇日、浦添村役所、安波茶に開庁。	五月、ハワイ移住六五周年式典。沖縄県海外協会が「四海兄弟」の記念碑をハワイへ贈る。

一九六六（昭和四二）年	伊祖出身でペルーに住む豊里陳貞が浦添村福祉協議会に二〇ドルを寄付。 一〇月二五日、浦添村商工会の結成。	
一九六七（昭和四二）年	宮城出身でメキシコから帰国した野原林助が浦添村社会福祉協議会に一〇ドルを寄付。 伊祖出身でハワイから帰国した銘苅カメが浦添村社会福祉協議会に一〇ドルを寄付。 十一月四日、城間出身でペルーに住む与座嘉目が浦添村社会福祉協議会に十五ドルを寄付。	
一九六八（昭和四三）年		ボリビアの第一オキナワ移住地、洪水のため大被害。 サイパン・テニアンでの慰霊祭が開始される。 七月、第一回ダバオ墓参団が出発する。
一九六九（昭和四四）年	浦添村人口 四〇〇〇〇人。 四月、むつみ会が結成される（現緑ヶ丘自治会）。	
一九七〇（昭和四五）年	七月一日、浦添村から浦添市になる（市制施行）。 十一月八日、茶山団地管理組合が結成される。	一月、フィリピンのダバオ市旧ミントル日本人墓地に「沖縄の塔」が建立される。
一九七一（昭和四六）年	広栄自治会が結成され市の認定を受ける。 四月、浦城小学校開校。 一〇月、大平インターチェンジ完成。	
一九七二（昭和四七）年	浦添ニュータウン自治会結成実行委員会が市の認定を受けて浦添ニュータウン自治会となる。 まちなと自治会が結成される（現上野自治会）。 一月、むつみ会が市の認定を受け緑ヶ丘自治会と改称。 四月、神森中学校開校。 浦添市の人口 五〇〇〇〇人	五月十五日、沖縄、日本へ復帰。

一九七三（昭和四八）年	三月四日、北米県人会から桜の苗木三〇〇本寄贈、伊祖城跡公園に植樹。 四月、牧港小学校開校。 四月八日、茶山団地管理組合が市に認定され茶山自治会に改称。	
一九七四（昭和四九）年	北原自治会、城間住宅自治会、国家公務員宿舍自治会の三任意団体が統合して、浦城自治会が結成され市の認定を受ける。 当山ハイツ自治会が結成される。 一月、牧港補給地区の従業員一三三七人の解雇を発表。	
一九七五（昭和五〇）年	伊祖メガネトンネル（国道三三〇号）貫通。 マチナトポイント自治会が結成される（現港川崎原自治会）。 四月一日、牧港ハイツ自治会が市の認定を受ける。	
一九七六（昭和五一）年	浦添市人口 六〇〇〇人。 三月、浦添小学校西原分校廃止。 四月、当山小学校開校。 五月、浦添グリーンハイツ自治会が結成される。 十二月十二日、浅野浦自治会が結成され市の認定を受ける。	
一九七七（昭和五二）年	浦添字諸見・内花郷友会（伊是名村）が結成される。 四月、内間小学校開校。 浦添グリーンハイツ自治会が市の認定を受ける。 七月、前田住宅自治会が結成される。	在伯沖繩協会から在伯沖繩県人会に改称。
一九七八（昭和五三）年	沖縄県外地引揚者協会浦添支部結成。	

一九八〇（昭和五五）年	浦添市在住崎本部郷友会が結成される。 四月、港川小学校開校。	
一九八一（昭和五六）年	浦添市の人口 七〇〇〇〇人。 四月一日、マチナトポイント自治会が市の認定を受ける（一九八七年港川崎原自治会と改称）。 まちなと自治会が市の認定を受け上野自治会と改称する。	
一九八二（昭和五七）年	マチナトタウン自治会が市の認定を受ける。 四月、宮城小学校、沢岬小学校開校。	
一九八三（昭和五八）年	四月一日、安川団地自治会が結成される。 浦西ニュータウン管理組合が結成される。	
一九八四（昭和五九）年	前田住宅自治会が市の認定を受け前田公務員宿舍自治会と改称する。 神森自治会が結成され市に認定される。 四月、港川中学校開校。	
一九八五（昭和六〇）年	四月一日、浦西ニュータウン管理組合が市の認定を受け、浦西自治会と改称する。 四月二三日、浦添市立図書館開館。 浦添市人口 八〇〇〇〇人。 ブラジル浦添市郷友会創立。	
一九八六（昭和六一）年	浦添市街地住宅内自治会が結成される。	
一九八七（昭和六二）年	三月九日、浦添市「太陽とみどりにあふれた国際性ゆたかな文化都市」表明。 五月一〇日、浦添市民体育館落成。	

一九八八（昭和六三）年	南米移住者子弟研修生受け入れ事業がはじまる。 四月一日、当山ハイツ自治会が市の認定を受ける。 前田小学校開校。 一〇月、県営経塚団地自治会が結成される。	
一九八九（平成元）年	浦添工業高等学校で、南洋群島帰還者会が招待したミクロネシアの高校生との交流がおこなわれる。	南洋群島帰還者会、ミクロネシアの高校生など慰霊祭に招待（二〇〇七年まで）。
一九九〇（平成二）年	二月、浦添市美術館開館。 四月、安川団地自治会が市に認定され安川自治会と改称する。 十一月、浦添市人口 九〇〇〇〇人。 八月、浦添出身海外移住者歓迎会開催。	八月、第一回世界のウチナーンチュ大会開催。
一九九二（平成四）年	四月、浦西中学校開校。	
一九九三（平成五）年	浦添在平安座郷友会が閉会。	
一九九五（平成七）年	十一月、浦添市出身世界のウチナーンチュ歓迎会開催	十一月、第二回世界のウチナーンチュ大会開催。
一九九七（平成九）年	七月、浦添市役所新庁舎落成。	
一九九八（平成一〇）年	五月一日、たくし自治会が結成される（現県営沢岬高層住宅自治会）。 四月一日、浦添ハイツ自治会が市の認定を受ける。 一〇月、浦添市人口 一〇万人。	ポリビアにオキナワ村が創設される。 在伯沖縄県人会からブラジル沖縄県人会に改称。
二〇〇〇（平成十二）年		一月、ハワイ移住一〇〇周年記念式典。
二〇〇一（平成十三）年	十一月二日、浦添市出身世界のウチナーンチュ歓迎会開催。	十一月、第三回世界のウチナーンチュ大会開催。
二〇〇三（平成十五）年	浦添在平安座郷友会が再結成される。	
二〇〇四（平成十六）年		八月、ポリビア移民五〇周年記念式典。
二〇〇六（平成十八）年	一〇月、世界のウチナーンチュ歓迎会開催。	一月、ペルー移住一〇〇周年記念式典。 一〇月、第四回世界のウチナーンチュ大会開催。

二〇〇七（平成十九）年	四月、浦添市でだこホール落成。 四月一日、浦添市街地住宅内自治会が市の認定を受けて浦添市街地住宅自治会と改称する。 県営経塚団地自治会が市の認定をうける。 五月一日、陽迎橋自治会結成準備会が結成される。	
二〇〇八（平成二〇）年	アルゼンチン浦添市民会結成。 四月一日、たくし自治会が市の認定を受け、県営沢岨高層住宅自治会に改称。 十一月、浦添市人口 十一万人。	八月、ブラジル・アルゼンチン移民二〇〇周年記念式典。
二〇〇九（平成二一）年	四月一日、陽迎橋自治会が市の認定を受ける。	
二〇一一（平成二三）年	九月、浦添市教育委員会、『浦添市移民史ビジュアル版その一 海外移民編』を発刊。 一〇月、世界のウラシニンチュウ歓迎会開催。	一〇月、第五回世界のウチナアンチュ大会開催。 十二月、台湾基隆市和平島に「琉球ウミンチュの像」が建立される。
二〇一二（平成二四）年	三月、ハワイ浦添市人会一〇〇周年。	
二〇一三（平成二五）年	三月、浦添市教育委員会、『浦添市移民史ビジュアル版その二 アジア太平洋・国内編』を発刊。 六月、伊祖神社建設時に高額寄付をしたペルー移民豊里陳盛の功績をたえる記念碑（一九三四年建立、沖縄戦で破壊）が再建される。	
二〇一四（平成二六）年	三月、浦添市教育委員会、『浦添市移民史 証言・資料編』を発刊。	
二〇一五（平成二七）年	三月、浦添市教育委員会、『浦添市移民史 本編』を発刊。	

◆調査協力者・資料提供者

『浦添市移民史 本編』の編集に際し、次の方々に多大なご協力をいただいた。

個人（五〇音順敬称略）

【ハワイ】

栗国亀子、上地芳子、レイモンド・トシオ・我如古、我如古ツル子、オトメ・宮平・サイキ、花子・レイチエル・城間、津波清範、仲西ピーター、トーマス・ホマレ・仲西、ローレンス・春雄・西原、西平宗光、ノワキ・比嘉ジュンコ、比嘉カメ子、ジョージ・コーゼン・宮城、ジェイムス・シンスケ・宮城、宮城盛吉、矢部・ドミンゴ・久美子

【アメリカ合衆国本土】

内間安樹、内間安松・勝、内間洋子、大城マヤ、キリアン・好子・山城、金城義男、ノブコ・グレイブス・新垣、佐久間トーマス保、沢岷安和、トーマス・弘・玉那覇、当銘貞夫、ノーマン・悦子、ツルコ・バンキャンブ・宮城、比嘉朝儀、ロビンソン・みどり・国吉

【ペルー】

安座間平敷テレサ房子、稲福与座ジュリアシゲコ、上原仲宗根千恵子、上原仲宗根テレサ、内間島袋ハルコ・テレサ、嘉手苅ローサトヨコ、島袋名幸キク、島袋重成エドアルド、シマブコ・島袋・アナ・ロシオ、新城菊子エウヘニア、比嘉宮城ジェシカ、比嘉ハツコ・エラディア・新垣、宮里千枝子、

宮城伊礼エレナ、宮城アントニオ幸太郎、宮城定雄アルベルト、宮城ファン辰良、宮城ファン、宮城ファン・カルロス、宮城マヌエル、マルコ宮城みつお、宮城ファナユキエ金城、与座エイ、与座仁明、ファナロサのぶ子徳田与座、みつえエルミシア与座、与座みよこ又吉ルス

【ブラジル】

赤嶺正信、赤嶺磯乃子、栗国重信、伊智柴徳、伊智春子、内間安一郎、内間清三、内間ツル子、親富祖政吉、親富祖秀美ダニエラ、神山明子、喜屋武千秋アンナ、喜屋武義雄、喜屋武吉春、米須亜由美シンディ、崎浜秀彦、島袋安雄、新垣トミ、棚原米次郎、玉城ジョルジ碇二、知念千代子、桃原喜三郎、当間清、當山全勝、仲里真常、仲西盛幸、仲程通二、仲本カンパニヤ・アナ・ルイザ、比嘉清、比嘉茂子、比嘉志世子、比嘉千代子、比嘉宗治、又吉清栄、又吉盛喜、又吉正雄、又吉正二、又吉義雄、松田優、宮城茂行、宮城信吉、宮城清徳、銘荊エレナ敬子、銘荊成二、銘荊ダルシオ、与那嶺真次、米田正吉、米田正美ルシアーナ

【アルゼンチン】

石川春江、伊舎良初子、米須エステバン・ロベルト、米須ロベルト、佐久田エンリケ・アンドレス、佐久田キク、佐久田マリア・アレハンドラ、根路銘ジョランダ、又吉初子、又吉パトリシア・ノエミ

【ボリビア】

比嘉健男、比嘉秀充、比嘉光子、又吉正行、山城徳子、善平千代

【ゲアム】

新崎美佐子、新崎盛弘、大宜見一、久場たかお、城間盛義、高良正子、ヘンリー・パンギリア、Robert Underwood, Fred Schuman, John Peterson, Angel Porin

【サイパン】

ゲレロ理得子、知念敏規、メギ・ナプティ・テノリオ、宮城通博、Yasuko T. Weathersbee, Escolasia Cabrera, Vicente T. Camacho, J.M. guerrero

【テニアン】

マリア・エバンジェリスタ、ミホ・エバンジェリスタ、カーメン・サンチェス

【バラオ】

金城文子、国吉昌則、小松資明、知花勇、知花真二、イブール・ニラバイ、Minoru Ueki, Weldow Gideon, Darin de Leon

【ボンペイ（ボナペ）】

秋永正子、秋永ヨシエ、植本盛、大村剛正、カトトヨコ、フランシスコ・カト、ニエベス・ギリメーテ、仲宗根米子、イグナシオ・ヒガ、正岡リーナ、山口正、山口弘、吉田英子、タカシ・ルシオス、Sidney Kilmete, Frank M. Senens, Hideo Takahashi, Aldis Berrance

【フィリピン】

アントニーナ・エスコビーリヤ、ジェネッタ・カミヤマ、Juseven Austero

【中国】

王延華、霍曉東、郭鑫、郭富純、韓相鋒、趙重苓、冷秀錦

【台湾】

安城秀、柯水源、邱桃子、許瑛玳、許光輝、小橋川貴之、潘江衛、卞鳳奎、彭吳招治、宮城菊、李國平

【国内】

粟国豊、一之瀬俊也、伊波武郎、伊波里紗、西表宏、上原克夫、大城健裕、大城治助、嘉手川重義、金山幸子、喜納兼一、金城クニ、小俣富美夫、崎浜盛喜、新里博昭、高梨修、高間エツ子、知念キク、桃原洋子、登野城喜一、中底長吉、仲宗根修、仲宗根亀吉、永峰真名、西平功、間弘志、羽島知之、比嘉鉄雄、平井芽阿里、外間浩、又吉栄信、宮城静夫、宮城敏雄、宮里かつ子、宮平知三、宮森信次、許田重治、安富俊雄、安村正信、柳田利夫、山下文武、山城興一郎

【県内】

赤嶺明乃、新垣安子、いのうえちず、上原清、浦崎政光、大城和喜、嘉陽妙子、宜野座輝美、佐久川志麻、島田竹代、新屋敷幸福、平良栄秀、知名・根路銘・マリア・ソレダ、中村源照、仲村美幸、外間長福、宮平民子、山内るり、山入端嘉弘、与那城昭広、与那覇澄子、饒平名シルビア

【市内】

安里岩雄、天久松蔵、新崎和子、安和良盛、伊計正一、池間宣子、池宮繁子、石川太郎、稲福房子、伊禮正二、伊禮武信、伊禮秀夫、上原清英、上原弘、上間美香、上間芳子、内間安光、内間政子、大得清行、大城政英、大城清勇、大嶺自忠、大嶺雪子、大湾朝明、大湾美智子、奥平勝三、奥本道夫、奥本好子、翁長盛夫、翁長ヨシ子、親川栄子、親富祖永

吉、嘉数キク子、垣花隆、垣花光子、兼次徳助、喜舎場宗英、喜舎場宗景、宜名真吉弘、儀間真善、儀間光男、喜屋武マサ、喜屋武隆仁、金城節子、金城隆、金城俊夫、具志幸一、久田オサエ、久田友明、桑江秀子、小橋川正雄、崎浜秀和、崎間あかね、佐多次宏、塩川浩一、志賀全夫、島袋以佐雄、島袋嘉盛、島袋武則、島袋ツルエ、島袋敏雄、島袋博一、島袋幸正、下地健造、下地幸子、新城智子、砂川サデ、楚南幸子、平良徹也、高良光雄、田中一郎、田中千恵子、棚原亀助、棚原武雄、棚原良雄、玉城勲、玉城英子、玉城ツネ子、知名弘、知念英太郎、知念和子、知念早智子、知念松子、知花千代子、照屋正元、當間幸吉、當間信子、當山盛治、友利敏雄、仲栄真八重、仲尾松一、仲西正勝、仲程ヨシ、仲間仁枝、西原安信、西原文子、西平文子、萩原清己、比嘉幸正、比嘉シゲ、比嘉眞助、比嘉正治、比嘉靖和、比嘉武宏、比嘉ツル、比嘉富子、比嘉弘政、比嘉房子、比嘉正宗、比嘉護、比嘉好子、比嘉良一、平敷寿恵子、外間弘、真栄城トミ、前田易、真栄平孝、前森徳一、又吉英仁、又吉盛一、又吉千代、又吉藤子、又吉百合子、松下義丸、松原勝吉、松本忠司、真島茂、宮城高進、宮城福正、宮城良善、宮里静江、宮里文子、宮平忠一、銘苅キク江、銘苅清文、銘苅光子、諸見元次、山里トヨ、山城俊雄、山原恵治、吉長武司、吉長芳子、與那嶺良子

団体

【国外市人会】

ハワイ浦添市人会、ペルー浦添市同志会、ブラジル浦添市郷友会、アルゼンチン浦添市民会、ボリビア浦添市郷友会

【国外県人会】

ハワイ沖縄連合会、北米沖縄県人会、ワシントン州沖縄県人クラブ

ペルー沖縄県人会、カンボグランデ市沖縄県人会、ブラジル沖縄県人会、在亜沖縄県人連合会、ボリビア沖縄県人会、グアム沖縄県人会

【国外関係機関】

マウイ沖縄文化センター、オキナワ日本ボリビア協会、グアム観光局、グアム大学ミクロネシア研究所、パラオ・コミュニティ・カレッジ、パラオ政府観光局、パラオ日本人会、ミクロネシア連邦政府観光局、フィリピン日系人会、ミンダナオ国際大学、旅順博物館、基隆市正濱國民小學、基隆市政府民政處、基隆市中正國民小學、基隆市文化局

【国内】

愛知沖縄県人会連合会、奄美在住沖縄県人会、奄美市立奄美博物館、群馬県大泉町多文化共生コミュニティセンター、群馬県大泉町役場、財団法人大垣市国際交流協会、岐阜県大垣市役所、大阪沖縄県人会連合会、大阪人権博物館、群馬県太田市役所、沖縄県人会兵庫県本部、沖縄県福岡情報センター、JICA横浜海外移住資料館、外務省外交史料館、川崎沖縄県人会、熊本沖縄県人会、熊本県健康福祉部社会福祉

課、熊本県立図書館、国立国会図書館、滋賀県湖南市役所、
湖南市立図書館、滋賀沖縄県人会、静岡沖縄県人会、株式会
社商船三井、昭和館、駐日パラオ共和国大使館、鶴見沖縄県
人会、愛知県豊橋市役所、奈良沖縄県人会、財団法人浜松市
国際交流協会、兵庫県立歴史博物館、福岡沖縄県人会、舞鶴
引揚記念館、満蒙開拓平和記念館、三重沖縄県人会、和歌山
市民図書館

【県内】

伊平屋村島尻郷友会、大浜アカハチ会、沖縄奄美連合会、沖
縄アルゼンチン友好協会、沖縄NGOセンター、沖縄県公文
書館、沖縄県国際交流課、沖縄県タバオ会、沖縄県福祉保健
部福祉・援護課援護班、沖縄県平和祈念資料館、沖縄県立図
書館、沖縄県立博物館・美術館、JICA沖縄国際セン
ター、沖縄国際大学南島文化研究所、沖縄サイパン会、沖縄
市総務課市史編集担当、沖縄しまて協会、沖縄女性史を考
える会、沖縄テニアン会、沖縄ニューカレドニア友好協会、
沖縄バヤリース株式会社、沖縄フィリピン協会、沖縄ブラジ
ル協会、沖縄ペルー協会、沖縄ポナペ友の会、沖縄ポリビア
協会、沖縄満州会、久宇良公民館、那覇市・近郊在住金武町
郷友会、南洋群島帰還者会、八重山・台湾親善交流協会、琉
球新報社、琉球大学国際沖縄研究所移民研究部門、琉球大学
附属図書館、沖縄県内地域史編集機関

【市内】

浦添市各自治会、浦添市老人クラブ連合会他市内各老人クラ
ブ、浦添在平安座郷友会、浦添市字小湾郷友会、浦添市在住

崎本部郷友会、西原字誌編集委員会、パンダ保育園、浦添市
国際交流課、浦添市秘書課、浦添市移民出稼ぎ移住調査ボラ
ンティアサークル

浦添市移民史編集委員会編集委員名簿

委員長 石川 友紀 琉球大学名誉教授

副委員長 又吉 盛清 沖縄大学客員教授

島袋 伸三 琉球大学名誉教授

石川 朋子 沖縄国際大学非常勤講師

崎原 恒新 元中学校長

桃原 一彦 沖縄国際大学准教授

仲間 孝藏 NPO法人うらおそい歴史ガイド友の会

下地 安広 浦添市教育委員会

浦添市移民史編集委員会専門部会委員名簿

○印 部会長

移民部会

○石川 友紀 琉球大学名誉教授

島袋 伸三 琉球大学名誉教授

町田 宗博 琉球大学教授

上原 盛毅 沖縄ポリヴィア協会相談役

前津 政廣 元浦添市職員

出稼部会

○石川 朋子 沖縄国際大学非常勤講師

宮内 久光 琉球大学教授

崎浜 靖 沖縄国際大学准教授

三木 健 ジャーナリスト

井口 学 元浦添市立図書館嘱託員

植民部会

○又吉 盛清 沖縄大学客員教授

野入 直美 琉球大学准教授

久部良和子 沖縄県文化観光スポーツ部文化振興課主査

移住部会

○崎原 恒新 元中学校長

桃原 一彦 沖縄国際大学准教授

大城 道子

土屋なおか

仲間 孝藏 NPO法人うらおそい歴史ガイド友の会

下地 安広 浦添市教育委員会

『浦添市移民史 本編』執筆者一覧（初出順）

◎は編集委員、○は専門委員

- ◎石川友紀（琉球大学名誉教授）
- ◎島袋伸三（琉球大学名誉教授）
- ◎前津政廣（元浦添市職員）
- ◎上原盛毅（沖縄ポリヴィア協会相談役）
- 津波 清（前浦添市教育長）
- ◎石川朋子（沖縄国際大学非常勤講師）
- ◎井口 学（元浦添市立図書館嘱託員）
- ◎三木 健（ジャーナリスト）
- ◎崎浜 靖（沖縄国際大学准教授）
- 仲地 清（大阪大学大学院特任教授）
- ◎又吉盛清（沖縄大学客員教授）
- ◎野入直美（琉球大学准教授）
- 松田良孝（八重山毎日新聞社）
- 謝花直美（沖縄タイムス編集局編集委員）
- ◎崎原恒新（元中学校長）
- ◎大城道子
- ◎桃原一彦（沖縄国際大学准教授）
- ◎下地安広（浦添市教育委員会）
- 清水史彦（恩納村誌編さん室嘱託員）
- ◎仲間孝藏（NPO法人うらおそい歴史ガイド友の会）
- ◎土屋なおか
- 長間安彦（元浦添市立図書館嘱託員）
- 又吉栄喜（小説家）
- ◎宮内久光（琉球大学教授）

浦添市移民史 本編

二〇一五（平成二七）年三月一七日発行
編集 浦添市移民史編集委員会

〒九〇一―二一四 沖縄県浦添市安波茶二―二―一
浦添市立図書館

電話 ○九八―八七六―四九四六

FAX ○九八―八七五―一七七二

発行 浦添市教育委員会

印刷 株式会社 ちとせ印刷

〒九〇一―二一三一 沖縄県浦添市牧港二―一―五

電話 ○九八―八七九―五八一四

FAX ○九八―八七七―八〇〇二